
Starry Sky

伏木 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Starry Sky

【Nコード】

N9303V

【作者名】

伏木 仁

【あらすじ】

ある少年は卑屈な高校生。またある少年は天才術士。決して交わることのないような二人は同じクラスメイトだった。私立花丸高校と軍立武闘聖火高校という二つの側面を持つ学校で繰り広げられる、ありふれて憂鬱な学校生活と緊迫してどこか幻想的な軍務。泥臭くて醜くも歩いていく男たちの物語は、星の顕現といわれる少女によって繋がっていく

誰かの泣き声が聞こえる。そんな気がした。

ボクはその声に導かれるように家を飛び出し、その声が聞こえてくる森へと入っていく。

その森は、怖い動物がいつぱい出るから絶対に近づいちゃだめだってお父さんとお母さんからきつく言われていたけど、その子の、今にも消えてしまいそうな泣き声を聞いていたら、じっとしてななんていられなかった。

結局それから森林を掻き分けて進んで行っても、怖い動物なんて出てこなかった。

するとボクはその先に、青白い光を見つけた。

その光に向かって、ただひたすら走って行く。小枝で頬が切れて、雑草で足が切れて、足を弦にひっかけて何回も転んだ。それでも走る足は止めなかった。

そうしてどれくらい走ったか分からない。気がつけばボクは綺麗な星空が見える丘にいた。

「ひっ……ぐ、えっ……ぐ」

「……大丈夫？」

彼女は、その丘の頂上で一人膝を抱えていた。綺麗な白くて長い髪を風になびかせて、透き通るような白い肌を震わせながら座っていた。

ボクがそう言うと、彼女は俯いていた顔を上げてボクを見た。

そこで初めて目が会った。その目は、そこから見える星空と同じ輝きを放っていた。

そうして、その今にも消えてしまいそうな顔を見ていたら、ボクの胸に、なんだか分からない熱くて苦いものがこみ上げてきた。

「どうしたの？ なにかあったの？」

ボクはたまらず声をかけた。それでも彼女の綺麗な瞳から流れ出

る涙は、止まる気配はない。

「一緒にあそぼう！」

「……あそぶ？」

「そう、あそぶ。なにかつらいことがあったら、友達と遊ぶの」

「ともだち……知ってる。君が私の、ともだち？」

「うん！ 君が遊んでくれるなら、ぼくたちは友達だよ」

そこで初めて、彼女は薄い笑みを浮かべたような気がする。

それからボクたちはその綺麗な丘と、草の匂いに包まれた森でひたすら遊んだ。とくに何かをしたわけじゃなくて、ただただ一緒に時間を過ごした。

その子は最初、少し戸惑っていたけど、時間が経つことにどんどん表情が緩まってくのが分かった。

彼女が笑うのが嬉しくて、ボクは彼女を笑わせようと夢中になって色んなことをやった。

「ボクたちは友達！ だから約束しよう。何があっても、ずっと友達だって」

「やくそく？」

「そう、こうして」

ボクは彼女と自分の小指を絡ませる。

「ゆーびきーりげんまんうーそついたらはりせーんぼんのーます。ゆびきつた」

ボクがそう言って手を離すと、彼女は不思議そうにボクを見つめてくる。

「だけどやがて、それが笑顔に変わる。つられてボクも笑った。

そうして時間はすぎて

「ボクもうそろそろ帰らないと。お母さんとお父さんに怒られちゃう」

ボクがそう言うと、笑みを浮かべてくれていた彼女はまた泣きそうな表情に戻ってしまふ。

「そっか……うん、それじゃあ帰らなきゃだね」

彼女はそう言って無理やりに笑っているようだった。

「君も一緒においでよ。こんなところにいちや風邪ひいちゃうよ」

「……うん。私は、ここでいいや」

「なんで？ 家で一緒にご飯食べようよ！ ボクたちはもう友達なんだよ？」

「ありがとう。でも、私の場所は……ここしかないから」

「……そう、なんだ」

「うん」

そうしてがんばって笑顔を作る彼女を見ていたら、ボクの心にまた熱いものがこみ上げてくる。

「じゃ、じゃあさ。また明日の夜……来てもいいかな」

「……」

彼女はしばらく何も話さなかった。何も話さないまま、丘の頂上で隣り合って座っているボクを、哀しい目で見つめてきた。

「ごめん。それもできないの」

そう言われた途端、ボクの中で何かが弾けた。

「なんでだよ！ ぼくたち友達じゃないか！」

ボクはそう言って手を振りほどいた。彼女はびっくりしたように距離をとる。けどその表情はすぐ、また初めて会ったときのような哀しいものへと変わる。

「もついいよ！ 君なんか知らない！ ずっとここにいればいいんだ！」

歯止めが利かなくなつたボクは、ついさつきしたばかりの約束も忘れてそう言つと、彼女のほうを見もしないで夜の森へと走り出す。去り際に彼女が何か言おうとしたけど、聞き取ることはできなかった。

ボクは無我夢中でその森を走る。相変わらず怖い動物なんて出てこない。来たときと同じように、静かな空気が辺りを支配しているだけだ。ボクはその中を何も考えずにただ走り続ける

そうして走っていくと、森の出口が遠い街の明かりと一緒に見え

てきた。

ボクが森から出る瞬間、さっきの少女の声がボクの耳に響いた。
「十年後、またこの丘で会おうね」

1 - 1 (前書き)

初投稿です。

至らない点だらけですがなんとか完結させるため頑張ります。

私の拙い文章が、皆さんのほどよい暇つぶしになれば幸いです。

サンタマリアの丘から見る星空は、この世のものとは思えないほど壮大で美しい。

その景観は見ているだけで呼吸するのを忘れてしまうほど人を夢中にさせてしまうもので、それを一目見るためだけに遙々北の大地エイレーンまで行く天体観測者も多いようだ。

しかし話はそう簡単ではなく、その丘は十年に一度しかその姿を現さないとされるある種伝説めいた場所で、加えてそこへたどり着くためには狼などの夜行性の獣たちが身を潜める深い森を通らなければならず、並の人間ではその森を目の前にしただけで尻込みし夜の街中へと逃げ帰ることになる。

よって、未だかつてその丘までたどり着いたという人は誰一人としていないらしい。

「おいおいちょっと待てよ。お前は今とても不思議なことを言っているぞ」

隣にいた金髪の少年がそんな野次を飛ばしてきた。短く整えられた金髪は地毛らしく、以前「染めてる」「不良」などと言ったときには憤怒して大喧嘩になったものだ。

その少年は今、私の横の席で自習に勤しんでいる。というか、その少年だけでなく私以外のクラスの生徒全員が黙々と勉強に励んでいた。なんとも結構なことである。

「なにが『この世のものとは思えないほどに壮大で美しい』だよ。誰も見たことないんじゃないか。そんなものどうやってたら分かるってんだ」

以前から勉強しながら話せる人間というものは、なかなかどうして器用なことをするものだと思っていた。そういうやつ脳みそは赤味噌と白味噌とねぎ味噌できてきているんだと今までは思っていたが、どうやらそれに蟹味噌を追加しなければいけないらしい。その

金髪少年は問題文を読みながら左手で答えを書き、右手でペンを回し両足でバスドラムさながらのリズムを取り始めた。奇行というほかあるまい。

「そんなどうでもいいこと言っていないでさ、さっさと話を進めるよ」
金髪の少年、アラム・リ・デルタンクス、通称アレンは走らせていたシャープペンシルの芯をブチっと折ることによってその感情を露にした。

「……ねぎ味噌は余計だったかね？」

「蟹味噌のほうが余計だばか！ ああーじゃなくて！！ いいから早く本題に入れたの、怒るぞ」

そんなボケだか突っ込みだか分からないようなセリフを、こちらを見もせず言っているアレン。

もう怒っているではないか。こいつは人の話を聞ける割に短気なのが玉に瑕である。

「だいたい名前の痕跡残っていないじゃんそれ。ボクの名前はアラムだ」

「おいおいうつせーぞその後ろ二人」

そう言っただけで窓際後方二席目の俺とその右隣のアレンに、先頭列の真ん中に席を構える強者、アマモトイチロウ天下一浪は立ち上がり鋭い視線を突き刺した。

なんと失敬な男か。今声を荒げたのは明らかにアレンではないかとぼつちりもいいところである。

「ちえ、お前がさっさと用件を済ませないから変なやつに目をつけられたじゃねーか」

「変なやつというのは聊か乱暴すぎる言い草だぞアレン。彼はあれでもこのクラスの委員長で、その身を塵にしてこの場を統治する役を快く受領したと聞く。我々もそれなりの敬意を持って接さねばこのクラスで生きていくための酸素を全て搾り取られかねん。ここは頭を垂れ、速やかにこの場を後にするのだ」

「てめえらが陥れたんだろが！ ていうか塵になるほど重い役だ

ったの!? これ」

細身で小柄。黒縁眼鏡に刈り上げお坊ちゃまヘア。これ以上ないほど委員長としての素質を兼ね備えている。

そんな彼を差し置いて委員長になれるような器の者は、このクラスにはいないのだ。自らの適性を少しは自覚するべきである。

まあ、乱暴な口調だけはそれにそぐわないとは思うが。

「つーかなにが速やかにこの場を後に、だよ。授業ばっくれようとしてるだけだろお前」

「これは異なこと。我々がこの厳正なる儀式の場を乱すようなことがあつてはならないから自ら自粛しようと私は申しているのですよ天下一一浪」

「人を世界一浪人してるみたいに言うな。それに儀式なんてないから。自習だから。さっさと席につけ」

辺りの生徒はまた始まったか、という反応すら飽きたようで誰一人として関心を向けてこない。皆机の上に置かれた教科書を後生大事に抱えながら勉強に勤しんでいる。授業をサボることなど出来ないに決まっている、などと思っているのだろう。ふふふ、結構結構。「断る。この場を乱すような不届き者を即刻退場処分へと葬らないとは、委員長殿にも焼きが廻ったとお見受けする……ふふふ、しかし安心するといいい。我々はプログラム通りに動くアシモ君ではない。この場は臨機応変に、自主退場という措置を取らせて頂く。文句がある場合は然るべき場を設けた後抗議するがいい。それでは」

「おいまたかよ、くっそ」

一浪の叱咤を背後に受けそう言い捨てると、私は参考書を片手に二冊ずつ持った相棒のアレンの首根っこを掴み廊下へと飛び出した。

誰もいない廊下をアレンの首を引つ張りながら走り進む。目指すはこの学校内で最も安静で高貴な場所である……そう、我々の本拠地。

「音楽準備室な。なーにが本拠地だよ。なんにもねーただのボロ部屋じゃねえか。ったく、あいつもよく付き合ってくれるよな」

うるさい野次など構いはしない。とにかく一刻も早く平穩の地へと辿り着かなければならないのだ。

全てはサンタマリアの丘へと辿りつくために。

新校舎三階の端に位置する教室から一度二階まで降り、渡り廊下を渡ってさらに三階へ上る。音楽室は旧校舎側の三階の端にある。

つまり、我々二年六組のちょうど向かい側に位置するするのだ。

しかし、教室側から見えるのは音楽室で授業をする雑共であり、我々はその影になるように配置された本拠地を根城にしている。

全ては計算通り。ザ・ブレイン・オブ・ザ・イヤー・俺、である。

「『ザ』二回入ってるから」

そうこうしているうちに旧校舎の三階へ差し掛かった。よし、ミツシヨンコンプリート。全ては滞りなく完遂された。

「あラー？ どうして生徒がこんなところニー？ 今は授業中ですヨー」

旧校舎三階へたどり着き廊下へ飛び出た俺たちの動きは、その冥府の番犬を彷彿とさせる声で軽く静止させられた。

「ば……なんであいつがこんなところに」

参考書に穴が開いてさらにはその先の床にまで穴を開けるのではないかという勢いで私に首根っこを掴まれたまま二宮金次郎像の如き姿勢で勉強に勤しんでいたアレンが、衝撃のあまり持っていた四冊の書籍全てを床へ落とした。そのうち一番の大物である900ページ超はあるかという本が私のアキレス腱を直撃する。痛いなく

そ。

しかし確かにこれは尋常ではない状況だった。

彼女のような者がここにいる事実は珍妙というよりは怪奇現象と
いったほうが近い。そしてこの場で我々の命が屠られた暁にはこの
旧校舎三階の廊下が二人組の男の幽霊が現れる怪奇現象の発生スポ
ットとして後世まで長きに渡り名を馳せることになるのである。

このような非常時にそんなどうでもいい思考がはたらいっていたの
は目の前に理路整然と佇む死の恐怖を冷えた目で見つめる自分が心
に根城を張っていたからに他ならない。人生において完璧などあり
はしない。いくつも壁を越えたからといって再び何かが立ちふさが
ることがないなど、若さゆえの希望的憶測にすぎないのだ。その温
度マイナス30度ほどの瞳を持った心の中の私がそんなことを言っ
た。

その冷静というより寒静といったほうが近いような心の中の私が、
沸騰しようとする頭を冷やすための冷却装置として機能していく。

よって私はこのような非常時においても、ゆっくりと百八十度タ
ーンを決め、余裕をかまして言葉を返せるのである。

「……おお、これはこれはミス・ベルタイガー。その全身から迸
る七色の光は我らのような罪深き者共が浴びるには聊か勿体のない
ものであります。我らが己の罪の重さゆえに自決を決め込む前
に、どうかお納めください」

私がオペラの如き軽やかなポーズを決めそう言うと、彼女はにこ
りと笑みを浮かべ言い放つ。

「ははハ、何言ってるかわかんないヨ。それより……」

彼女はそこで少し間を置く。こういった間は嫌な予感しかしない。
そしてその予感は大抵、

「今、授業をサボろうとしてましたか？」
当たるのだ。

彼女がそう言った途端、その見る者全てを魅了する金色の長髪が
急激に逆立ち、青く潤った瞳に赤黒い光が灯る。左手を前に翳すと、

そこへ長さ二メートルはあるかという巨大な斧が出現する。

ミス・ベルタイガーはその斧を左手で掴むと、大きく振り抜く。あまりの早さに風速が音速を超えソニックブームが生じる。本来学校の癒し系先生として片言の日本語で英語の授業をする姿はそこにはなく、凄惨な笑みと見た者全てが気圧される覇気のみがそこにはあった。

地獄の番犬ケルベロスが一頭、鮮血のベルタイガーこと西城ウィットニー。

この私立花丸高等学校の英語教師として人気を集める女性教師。

そして裏の名、軍立武闘聖火高校の剣術課の最高顧問としてその名を知らしめる、実力派教師。

普段は凜とした姿と生徒を思いやる優しさに溢れる彼女だが、一度戦争へ赴くとなるとその姿は一転し、周辺各国に「狂気のクイーン」と知らしめるほどの戦闘狂へ変貌する。今目の前にいるのは、まさにその状態の彼女なのだろうという予感が脳に浮かんた。

「授業の抜け出しはいけないなあ、柏木州君。ねえ？」

気づくと西城は片言の日本語ではなくなっていた。まずい、これはいよいよ本気という合図か。狂気のクイーンの降臨だ。

彼女は聖高側では特別講師として稀に訓練へ顔を出すことがあるが、その際は普段の訓練など苔が浮いているぬるま湯と思えるほど熾烈極まるものと化す。この女を片言の日本語で喋る天然英語教師だなんて、花高の生徒も平和な頭をしているなあとしみじみ思う。

このような状況に幾度と無く遭遇してきた私は、すでにその対処法として十六の方法をシュミレートしてみた。しかしどれも得策といえるには程遠いものばかりだ。大人しく教室へ戻るとというのが一番の安全策といえた。

それに西城の評判を思うと抜け出そうとした精神に対して説教を垂れるようなことはまずあるまい。全ての戦場で結果のみを追求してきた彼女にとって、そこに至るまでの過程などパスタに乗っているパセリ程度の価値しかないのだ。

「……おい柏木どうしてくれる。俺はここで死ぬのはごめんだぞ」
「そう怖気づくな我がライトアームよ。今超高速シミュレート中だ」
「シミュレートすつことなんてあるかよ。大人しく教室に戻る以外の選択をした時点で即ゲームオーバーだ」

分かつている。しかしそれで西城をやり過ごせたとしても他の教師の目もある。もし何らかの原因で授業を抜け出したという情報が漏れてしまったなら、今後この学校で安息が訪れることなどないと思っただろうがいろいろだ。

それに今は何より、この戦闘狂をやり過ぎしあの丘へと赴く算段を立てたかった。誰よりも早くあの地へたどり着くために。

「何があるってんだよそこに。命張るほどのものなのか。それに今じゃなくてもいいだろ」

「……くっ」

普段授業を抜け出すときは、我がクラスの記憶操作を全て一浪に任せている。誰も我々が教室を抜け出したことなど気づきはしない。そして廊下ですれ違う者がいたとしても、その姿が目視されることはない。その手際の良さは完全犯罪さながらであった。いや、そのはずだった。

しかし現在、その姿が目視されている。花高側の教師で今の状態の我々を見ることができるのは恐らく、聖高側と兼任している校長、教頭、各課の最高顧問のみ。それぞれが二校の業務で多忙を極めており、それと平行して軍務もこなす超人のような者ばかりだ。

「……ん、まてよ。」

「おいお前も早く謝れって。俺もう二十回以上謝っただけけど」
「ミス・ベルタイガー、お遊びはこの辺でいいでしょう。早く本題へ入ってください」

爆発寸前の西城のリアの中、精一杯見栄を張って私が凜と言いつつ、彼女の瞳が一瞬揺れ動くのが分かった。どうやらビンゴのようだ。

「ば、いいからここは謝るんだよ！ そしてさっさと教室に戻って

何食わぬ顔で勉強に戻るんだ！ それしか生きる道はないって、いやホント！」

くっ、我がライトアームともあるうものがなんたる醜態を晒してくれる。これでは特撮なんかのヒロインを誑かすためだけに登場する噛ませパンピーと一緒にではないか。もう少し聖高の一エリートとしての自覚が欲しいところだ。

「あなたは軍においては准将という非常に位の高い立場をお持ちだ。しかしそんなあなたがこのような場所で若者の指導にあたっていているのは、軍がそれほど人材育成に本気になっているからに他ならない。それはもう、最高顧問ともあるう方が授業中に特に意味もなく廊下を闊歩する、なんて暇がないほどに」

すると今度は彼女の右手の指がびくつと反応するのが分かった。

しかしそれと同時に、彼女のリーアが更に膨れ上がる。

「先生のリーアがどんどん膨れ上がってるじゃねえか！ 怒らせてどうすんだよ！！」

リーアというのは剣気や闘気、覇気、そして殺気などの気を極限まで研ぎ澄まし、体内の魔力と合成し戦闘力へと還元したものだ。

リーアは強ければ強いほどその色は変わっていき、青から黄、緑、赤へと変色させる。このリーアを生じさせることによりそれまでの比にならないほどの能力を得ることができる反面、身体への負担も尋常ではなくなる。そのため、習得していても戦場においては奥の手として使用する兵士が多い。

しかし高度な魔術や体技、剣技はほとんどがこのリーアなしでは成し得ないため、一流の兵士はいつどんな状況で何が起ころうとも対処できるように精神を研ぎ澄まし、終始リーアを纏っていると聞く。

そう、例えば今日の前にいる西城のように。

隣にいるアレンが私の頭を三回なぐり頭を下げるように強く床へと押し付けてくる。ばか者め、私の術が切れてしまったらこの吹き荒れる彼女のリーアが学校全体を覆いつくし、忽ちに消し飛んでし

まうというのに。

私はとにかく早くことを収めようと、意を決して王手をかけた。「端的に申しますと、あなたは我々に用がある。そしてそれはただの用事じゃあない。こちら側での平穩を打ち破る音と共に飛び込んでくるような」

彼女のリーアが私の術で抑えられる限度を超えようとする中、私は言い放つ。

「そう、例えば軍令のような」

瞬間、爆発しそうになっていた西城のリーアが一気に消沈した。

助かった……か？

「……関係ないな」

かと思つた途端、先ほどまでよりも更に一回り濃く、強いリーアが俺の状態空間内に膨れ上がった。

先ほどまでは緑であつたのに対し今度は赤くなっている。戦場で名を馳せる優れた兵士でもせいぜい黄色が限界だ。それほどリーアを纏うということは並々ならぬ体力と精神力を要するのである。

それを初めから上回っていた西城が段違いであることは既知であつたが、よもや赤のリーアまで出してくることになるとは、完全に予想の範疇外だ。

緑のリーアは疾風を呼び、赤のリーアは業炎を呼ぶ。リーアには生じさせた際に属性が付加される。今彼女から進む炎は俺の状態空間内にあることよつて辛うじて抑えているが、もはや術が切れ学校全体が塵と化するのは時間の問題といえた。

何かまずつたか？ いやしかし、彼女の反応を見る限り虎の尻尾は踏んでいないはずである。

それではなぜ……

「先生のリーアが赤い。彼女ほどの人の赤いリーア……それで死ぬなら本望かな」

隣で阿呆が何か呟いているが気にはしない。西城はその鋭い眼光をこちらへ向ける。

目の焦点が俺の瞳を捉えた。

「授業放棄はいかなる理由があるうと処分に帰す。それが我が武闘聖火高校の掟。そして掟破りへは人格崩壊を起こすまでの生き地獄、もしくは死が待っている」

説明する声が一切の色を帯びていない。電子音のような説明が淡々と流れていくようだ。

しかし、聖高の罰則がまさかそこまで厳しいものだとは知らなかった。今まで一度として見つかったことなどないのだから、当たり前といえば当たり前だ。そもそもこちら側では見つかるはずがないのだから。

「そして私は今、お前たちを裁く権限が与えられている」

「それは……」

つまり、本当にこいつは俺たちを裁くためにここへ来たっていいのか……馬鹿な。仮にも花高側と聖高側の生徒コネクターである俺たちを、何の説明もなく殺すというのか。馬鹿げている。

「……軍は今どうなっている」

「知らない。私はお前たちを裁くのみ。消える虫けら」

そう言ったと同時に西城との距離が一瞬にしてゼロへと帰した。

赤のリーアを帯びた刃が喉元へ触れる感触。無機質な金属の冷えが高ぶっていた胸中をえぐる。

ああ、俺の人生は授業をサボった罰で終わるのか。

辺りがスローモーションとなっていくなか、走馬灯を眺めながらそんなことを思っていた。斧の刃が首の皮を切り、肉に至り、骨を粉碎する。辺りからは全ての光が遮断され、真空であるかのように無音な空気へと変じていく……

刹那。

「あつはつは」

そんな女の笑い声と共に、眺めていた走馬灯も、包み込むように広がっていた赤いリーアも、確かに首を粉碎したはずの巨大アックスも、全てが消え去っていた。

辺りはいたって平凡とした廊下が続いており、音楽室からは平和を象徴するかのような生徒の暢気な歌が聞こえてくる。

ついこの今まで生死の狭間を彷徨っていた俺の精神は、今やすつかりと元通りとなった数分前までの俺たちの日常の風景へ適合できず、完全に置いてけぼりにされてしまっていた。

「柏木州君。だめじゃない、途中で術を解いたりしちゃ。この学校が崩壊しちゃったら、それこそ私が生き地獄を味合わされてしまうわ」

そう言われて初めて、先ほどの笑い声が西城のものであることが分かった。しかし先ほどまでの狂った女の姿はそこにはなく、いつも通り剣術課の最高顧問としての毅然とした、しかし優しげな姿があった。

それと同時に、自分がいつのまにか術を解いてしまっていたことに気づく。常に奥底に冷えた自分を持っていた俺ではあったが、流石に自らの死という現実を前にするとそれさえも綻びてしまうようだ。

「……はは」

正直死を覚悟した。

確かにどこか腑に落ちない部分だらけではあったが、斧で首が確かに刈り取られる感触があったのだ。

その傷も今や跡一つなく修復されているはいるが、芸にしては細かすぎである。リアルリアル、いやまじで。

「あああああああもう先生——まじで死ぬと思いましたよ
おおおお——」

アレンがどさくさに紛れて彼女の豊満な胸へと飛び込んでいく。
西城はそれをがっしりと受け止めふふつと笑う。その笑顔を見て初
めて、俺も肩の力を抜いた。

あれ、アレンと西城は知り合いなのか。ていうか、こんなフレンド
リーな顧問だったのか。外や意外である。

「なにももう、全く抵抗しないなんて君らしくないんじゃない？」
それはどこか少しすねたような言い草だった。

俺らしさ、というのはイマイチ自分ではわからないが、授業をサ
ボった罰だと言われれば仕方がないとも思った。

これが軍に所属するものの思考というものなのだろうか。少し複
雑だ。

「いや、教官のような方が相手では」

「今は”先生”でしょ？」

「……先生のような方の本気のリアを目の当たりにしてしまっ
たのですから、罪として、甘んじて受けるつもりでした」

「というか、さっきまでの『おおミス・ベルタイガー！』とか言
う柏木君はどこへ行ってしまったのかしら？」

彼女はしつこく抱きつこうとするアレンを片手で制しながらから
かうようにそう言う。先ほどまでは赤いリアを纏うほど本気の戦
闘モードだったのに、一気に転じてこの空気を出せるのはある意味
恐ろしい。

「はは、先生。今日の前にいるのは花丸高校二年六組の変人柏木じ
やないことはご存知でしょう？」

抱きつくのを諦めたのか俺の右隣へ戻り、手でこちらを指してく
るアレン。

死を覚悟したような表情や安心しきった表情、ちよるちよると動
く物腰の軽さは普段のガリ勉強からは考えられないが、この軽薄な
男こそが聖高で名を馳せる頭脳派、アラム・リ・デルタンクスのも

う一つの顔である。

「武闘聖火高校クラスS0、体術・剣術・妖術全てにおいて特一級を与えられた天才、血戦知らずのジョーカー。柏木州君、だね」

アレンの言葉にかぶせるように西城が続けた。

「ご名答です。そしてなぜか”私”から”俺”に変わるんですこいつ」

「うるさい」

俺としてはそんなことはどうでもいい。今は何より西城の意図が気になる。

普通俺たち生徒が顧問に対して面会を望む場合、然るべき書類を提出しなければコンタクトは取れない。ましてやそれが最高顧問ともなれば、通常訓練の講師から紹介状を貰わなければならない。

つまり、彼女ほどの大物がこうして俺たちに何の前触れも無くコンタクトをとってきたということは、何か尋常ではない用事があるということだ。

「西城先生、あなたの意図を伺いたい。俺たちに何の用でしょうか。先ほどのアレは本当に罰則として俺たちを殺そうとしたのですか。

そもそもなぜ俺のような一生徒のことを貴方がご存知なのでしょうか。それに」

「ああーもう待つて待つて。そんなに一気にまくし立てられたら先生こわいーきゃー助けてアラムんー」

「柏木てめえ殺すー!!」

く、黙っている駄犬が。そもそも鮮血ともあるうものがこんな姿を生徒に晒しているのか。今までは稀に授業へと顔を出す姿しか見てこなかったため、凜とした女性像を勝手に作り上げてしまっていた。それが目の前の女と同一人物だとはにはわかには信じがたい。

「先生、俺は真面目に」

「分かってる分かかってるって。ちゃんと説明するよ……でもこんな場所じゃあなんだし、ちょっと移動しましょうか」

そう言い、西城は音楽室から階段を挟んで反対側にある家庭科室

のドアを開けた。

しかしそこは家庭科室ではなく、聖高側とのターミナルポイントと化しており、行き先は特別室のような場所だ。今の俺は見なくても分かる。

「ささ、早く行きましょう」

俺たち二人は背中をぐいぐい押され、そのドアへと入っていった。

1 - 3 (後書き)

一章はここまでです。

いきなり色々な用語が飛び交って、少し混乱された方もいるかと思われます。

今後はその点も頭に置き、分かりやすいペースで進めていけるよう精進してまいりたいと思います。

よろしければ今後ともお付き合い下さいまし。

2 - 1 (前書き)

長い一日の始まりです笑

彼らにとって最良の結末が訪れますように。

そして願わくば、皆様に娯楽を。

教室内にシャーペンシルのカリカリという音が響き渡っている。その音を助長させるかのように俺もまた必死でシャーペンシルを走らせていた。そうすることによって、そのカリカリという音と共に俺自身がこのクラスの輪へ入っていけるような気がしたからだ。

俺が所属する私立花丸高校は、並の生徒に並に勉強をさせ並の大学へ送るということを目標にしたような吉野屋の牛丼よりも並な高校だ。

ここ三戸羽^{ミトバル}琉市内の高校の中でも私立のわりに信じられないほど学費が安く、そこそこ勉強をすれば大抵の者は入ることができるというお手軽な位置を占めており、最寄の駅からも非常に近いため中学生当時、高校を探していて見つけた際には試着したジーンズが裾直しが不要なほどジャストなサイズだったときのような感動を覚えたものだ。

しかしいざ入学してみて、イメージとのギャップに落胆するなどということはいたって平凡なことだ。

そしてそれはこの花高においても例外ではない。入学してなにより驚いたのは校則だ。校則は大抵生徒手帳の中にその全てが記されており、その存在は誰も見なくなった定款の如く皆の記憶から消去され、有事の際にのみその役割を発揮する消火器のような立ち位置を占めているのが一般的だと思う。

入学してすぐ校則を確認するような生徒など稀有な存在であり、ほとんどの生徒は自らの浅い人生経験の中で培ってきた常識を元に行動することとなる。

しかしこの高校においては校則を知らぬことは生徒にあらず、といえるほど校則が重んじられている。それはさながら「無知は罪なり」という校訓を抱えているかのようで、校則が我々の生活に与える影響が実に甚大だった。

特徴は第九項にある。

そこにはありとあらゆる禁止事項が記されていた。それも普通なら校則にするまでもない、授業の抜け出し厳禁であったり、教師の言うことの厳守など、教師が生徒を指導する際の典型的なものばかりだ。初めてそれを知ったとき、そのあまりにも稚拙な内容にこの九項の発案者は小学校二年生くらいなのではないかと思つたものだ。しかしそんな俺の浮ついた印象に一筋の冷水を差すかのように、無数に記されている禁止事項の最後にこんなことが書かれていた。

上記の禁止事項を一つでも違反した場合、超厳罰に処す。

超厳罰という阿呆のような言葉が堂々と校則として記されているという異常事態はさておき、このような校則を全校生徒全てに卒業まで一人残らず守らせようなど無謀といえよう。高校生にとって、先生に反抗し授業をサボるなどということはいたつてありふれたことなのだ。高校入学当時はそんな考えの者が圧倒的に多く、授業サボりや指導無視なんてことはざらにあった。

しかし、今ではもうそんな考えの者は誰一人としていなかった。校則を破った者の末路を、超厳罰という言葉の意味を、花高に一年半も所属してきた俺を含む二学年生全員が感じ取っていたからだ。校則を破った者の一部が、ある日忽然と姿を消す。そこにどのような分類が生じるのかは定かではないが、その「生徒不可解消失事件」と噂される事態は校則を軽視していた生徒の目に罪という杭を打ちつけるのには十分だった。

そしてどういふわけか、その事実を知っているのは花高の生徒のみであり、社会に存在するどの機関も、引いては消失した生徒と家族ぐるみの付き合いをしていたという生徒の兄妹・両親までもがその記憶を失っていた。そんな事実が俺たちの学校生活に噂という形で蔓延して以来、校則を破ろうなどということは誰一人として言い出さなかった。

したがって今、俺を含むクラス全員が勉強に没頭している最中、席を立ち馬鹿げた言い合いを始めた男二人はかなりの注目を浴びた。

先生からは一時間この教室で静かに自習をしているという指示だったので、それに違反しようとしている（静かにという点で既に違反している気がするが）この男二人の末路が気になったのだろう。皆勉強する素振りをしつつその目は手元の書物になどいつていない人の視線に敏感な俺には教室を支配するその気配がありありと感じ取れた。

「フーかなにが速やかにこの場を後に、だよ。授業ばっくれようとしてるだけだろお前」

俺の所属する二年六組の委員長、天下一浪がそんなことを言った。黒髪にダサイマッシュルームのような髪型は、いまだきどんなお坊ちゃまでもやらないであろうほどお坊ちゃま然としており最早ダサイと言うことすらダサく思えてくる。更には太い黒縁の眼鏡をかけており、身長順に並ばせた際には必ず先頭に来るほどの小柄だ。

なんでこんないじめられっ子のような風貌をした者が委員長なのか甚だ疑問に思えてくるが、委員長を決めたホームルームのことを思うと同情の念も少しは沸いてくるというもの。不憫な男だ。

しかし校則違反として最も件数の多かった「授業放棄」は不可解生徒消失事件の一番の原因となったものだ。その校則を破るなど、委員長たるものが軽々しく口にしていいことではない。見た目の割りにその口から発せられる言葉はオブラートのような生易しい代物とは無縁の状態のもので、そのギャップが無償に嫌になってくる。この皆が厳しい校則を守りつつもそれなりに青春を謳歌しようとしているクラスの委員長として、一員として、いるべきでないと思え思え……まあ、俺がいったことではないが。

しかし何より、この一年半で完全にタブーとなっている授業放棄をクラス全員の前でやってのけようとしている、

「我々がこの厳正なる儀式の場を乱すようなことがあってはならないから自ら自粛しよう」と私は申しているのですよ」

この変人、柏木州もまたこのクラスに在るべきではない。セリフ掛かった口調がいちいち鼻につく。しかしこれで意外と人当たりは

良いというのだから尚更たちが悪い。そのせいで変人とは言われているものの男女共に人望がある。

そう。こいつは俺よりずっと常識ハズレな奴なのに、俺よりずっと友達も多い。そんな事実がたまらなく悔しく、妬ましかった。

「文句がある場合は然るべき場を設けた後抗議するがいい。それでは」

そんな馬鹿みたいな捨て台詞を残したかと思うと、柏木が隣のラムというガリ勉で無口な留学生を連れて教室を飛び出していった。「……嘘だろ。本当に出て行きやがった」

流石に勉強を装っていた生徒たちも騒然となる。本当に授業を放棄した生徒など現二学年に昇級した者の中には聞いたことがない。教室内は出て行った二人に対する心配の声や、逆に非難の声など様々な声が行き交う。

すると二人が出て行った後、なにやらぶつくさ言っていた一浪が教壇に立ち頭上で二回手を叩いた。

「はいはい皆さん静粛に。静かに自習というのが先生からの言いけですよ、守らないと」

「けど一浪よ。あいつら止めなくていいのかよ。流石に授業の抜け出しはまずいだろ」

「そうよ。授業放棄なんてしたらどうなるかわかんないし……今からでも止めてあげようよ」

「学級委員長だろ。なに黙って見てんだよ」

何人かの生徒が一浪を非難するように言った。全くその通りだと思う。クラスの委員長として、あの場は何がなんでも止めるべきだった。確かに以前授業を放棄しても嚴重注意だけで済んだ生徒も多いと聞くが、それでも確かに消えてしまった生徒もいるのだ。柏木がどんなにふざけた奴でもクラスの一員であることに変わりはない。クラスメイトのことを考えればぶん殴つても止めるべきだった。恐らく俺を含むクラスの生徒全員が同じ想いを抱いているはずだ。

しかし一浪は表情をピクリとも動かさず、そのような非難の視線

を浴びたまま平然と言い放った。

「じゃあなんで誰も止めなかったの？」

鋭い視線と険悪な雰囲気をぴしゃりと弾くようなその言葉に、騒々しかった室内は一気に静まり返った。

「自分には関係ない。誰かがやってくれるはず。そんな風に思ってたんじゃないの、みんなさ。そうして二人が出て行って、その直前に話してた僕に委員長っていう立場を殊更大きく押し付けて非難的にしようって。皆がやっているのはそういうことだよ。偽善も甚だしいなあ」

一浪は生徒たちを見回して言った。その口調は全く変化がなかった。普段から学級委員長として話し合いをするときのような、「席替えしようと思っただけど、どんな方法がいいかみんなの意見を聞かせてくれないかな」なんて言うときのような語気、表情と何も変わらないのだ。

生徒たちは何も言い返すことができない。今の一浪の言葉は、普段の学校生活において感じる人が多いが口に出すことは憚られるような、真実の一片といえた。

そしてそれは、俺がこのクラスで恐らく一番露骨に感じていたことでもあった。

先ほどまで騒々しく騒いでいた生徒たちも、もう一浪の言葉に反論することもできないようだった。

そんな教室に嫌な沈黙が走る中、一浪がふつと笑った。彼の癖なのだろう、今度は胸の前でまた二回両手を叩いた。

「まあそんなことはどうだっていいよ。どうせ」と、そこまで言いかけたところで一浪の緩い表情が何かはじけたように驚愕のものへと変じた。

するとその数瞬後、強い強風がクラスを襲った。しかし様子がおかしい。普通風は外から吹くもので、その際は窓が強く揺れるはずだ。しかし今の風は明らかに廊下側から吹いてきた。それも尋常ではないほどの強風であることがガタガタというドアの揺れから察せ

られた。

こんな強い風が吹いているのに吹き飛ばされる気配がないこのドアがすごいというべきだろうか。しかし尚もその暴風は続く。

「やだなに……」

「おいおいおい、なんだってんだよ」

学校の中で台風が起こっているんじゃないかというほどの風に、再びざわめきだすクラス。窓から外を見てみても突風など全く吹いておらず、晴れ晴れとした夏の景色が広がっている。

何が起こっているのかを見ようと、男子生徒数人が廊下へ出て行くとする。すると教卓をドンツと叩く音が教室に鳴り響いた。

「馬鹿野郎！ 教室から出るんじゃないやねえ！！」

叩いたのは一浪だった。

彼は先ほどまでの余裕の欠片も残っていない表情で声を張り上げる。目はつり上がり、黒い髪に隠れた瞳がギリリと光る。クラスで最も小柄なのにも関わらず、その剣幕は他の生徒誰一人として有無を言わせない迫力があつた。正直怖い。

「いいか、全員何があつてもこの教室から出るなよ！ 何があつても、絶対にだ」

「い、一浪君」

「大丈夫だから。このままじっと耐えて」

不安がる生徒にも率先的に声を掛けて周る一浪。このような非常事態にあくまで毅然として皆を落ち着かせようとする一浪の姿に、悔しいが俺自身も仄かな安心感を抱いていた。

一浪が皆を鎮め少し経ち、風がぴたりと止んだ。クラス内を奇妙な静寂が包む。

その様子を見計らったかのように一浪が再び教壇へと上がり、左手を胸に当て右手を前へ突き出すようなポーズを取った。

何事だ、と訝しむ暇もなかった。

その瞬間、教室全体に網膜を直撃するような眩い光が広がった。

「あー終わったー。部活行こうぜー」

「あれ、そっぴや今日柏木どうしたんだ」

「なんか家の手伝いが忙しいとかで少し休むらしいぜ。学校には許可とってあるってよ」

「あー親父さん鍛冶屋だっけ。将来継ぐのかねえ」

「さあ。ていうか鍛冶屋って今更どうなんだろうな。今の時代戦争は銃とかミサイルとかだろ？ 刀って」

「戦争のことなんて俺ら一般人にはわかんねえよ。それより留学生もいねえじゃん」

「そっちのほうは聞いてないな。遂に家に専属家庭教師でも雇ったか」

「はは、まさか」

帰りのホームルームが終了して、各人友達と話をしながら部活へと散らばっていく。

夏独特の湿気を帯びた風が窓際最前列に席を置く俺の頬にぬるつと纏わりついてくる。夏生まれの俺にとってこの空気は存外嫌いではない。うんざりするような学校での一日が終わったこともあり、夏の放課後という時間は俺にとって、終始心を支配する不吉な塊を一時的に取り除いてくれる憩いのときなのだ。

俺は持ち帰る必要のない教科書一式をロッカーへと放り込み、学校指定のバッグへ荷物を詰めると足早に教室を後にした。

廊下を歩いて行くと夏の温度と響き渡る蝉の鳴き声につられて活気になった生徒の声があちこちから飛び込んでくる。こうしていると季節や天候には人間の感情を揺り動かす確かな力があるのだと感じられる。

階段を下り、下駄箱へ靴を入れようとしたとき、背後から女子生徒に呼び止められた。

「桜井君」

振り向くとそこには同じクラスの女子生徒が少し強張ったような表情で立っていた。

久々の外部からの刺激に少しテンパリ気味の脳を一括し、俺は搾り取るように言葉を嚙んだ。

「志乃、さん」

「うん。その、今日文芸部の批評会だよ。部長からは全員参加って言われてる……し」

まるで腫れ物に触れるかのように志乃さんはじんわりと言葉を継ぐ。そんな様子を見てみると俺の心に一掬いの罪悪感がこみ上げてくる。

……まただ。

志乃さんはクラスではいつも元氣ハツラツで太陽のような人だ。

誰とでも仲良くできる大らかさを持っており、彼女に話しかけられた人はたちまちその魅力に魅了され行動を共にするようになる。

一年の頃から同じクラスで部活も同じだった俺には、今の志乃さんを取り巻く友人の渦が出来上がるまでの経過を全て見ることが出来ていた。もう「友達を百人作るための66のコツ」というタイトルでエッセイを出版してもいいのではないかと思うくらいの手際の良さだった。

いや、それを彼女は恐らく素でやっているのだろうことは想像に難くない。それほど彼女の振りまく善人オーラは目視できるほどに濃く、人の心に色があるとすれば彼女の心は明らかに白だった。

そんな志乃さんが、今はこんなにもしどろもどろになってしまっている。その原因が俺にあるのは言うまでもない。

どんなに人当たりの良い人でも、クラスで浮いていていつも教室で本ばかり読んでいるような人間と話すのだから、話す勝手が分からないのも無理はないだろう。いや、単に嫌われているだけといったほうが潔いか。部活関連で俺と話するときの、志乃さんの表情に俺は常にやりきれない思いを抱いていた。

だから今もいつも明るい志乃さんにこんな困らせていては申し訳ないし、何より俺がこの空気に耐えられなかったので手短に済ませようと思った。

「あ、うん。知ってるけど、今日はちょっと気分が乗らないし帰ろうと思って」

「でも部長は絶対参加だつて。学校の決まりで、きちんとした理由が無くて部活サボると今度からその部活辞めさせられちゃうんだよ」「え……」

「もしかして、知らなかった？ その、部活参加の義務化のこと」そんな事實は一ミリたりとも聞いた覚えがない。そんな重要なことを何故誰一人として教えてくれなかったのだろうか。いくら俺が無口だからといって、仮にも部活仲間はこの扱いはあんまりだ。

「その、たぶん皆もう知ってると思うたんだよ。一応学内掲示板に張り紙もあつたから」

こんな俺に、例えフォローであってもそのようなことを言ってくれる彼女はやはり慈愛に溢れた人だと思った。思えば入学当初は、俺に対しても積極的に話しかけてくれたものだ。あの頃のことを古いレトロ映画のように俺の脳内に再生される。

しかしそんな映像を俺は気力で遮断する。つまりは今日は部活へ参加しなくてはならないという事実だけが残るのだ。

「そうなんだ。うん、ありがとう。これから行くよ」「うん、じゃあまたあとで」

そう言う志乃さんは俺を置いてそそくさと歩いていった。

なにも文芸部室は進路指導室で行く場所も一緒なのだから一緒に行けばいいではないか、とは思わない。彼女の心中を察すれば俺と一緒に校舎を歩くなど反吐が出るほど嫌なはずだ。それにそのような事態は俺のほうもごめんだ。罪悪感と虚無感に押しつぶされてしまいかねない。

俺は取り出そうとしていた外靴をしまい、スリッパを履き進路指導室へと向かった。

「素晴らしい！ やはり君を誘ったのは正解だったよ！ 僕の目に狂いはなかった！」

進路指導室で円形に組まれた机に文芸部員全員が座っている。その中で黒板の前に中心となるように置かれている席が部長席だった。批評会を一通り終えた今、部長はその場で立ち上がり、ある生徒の作品を絶賛している。

言うまでもないが当然、俺ではない。

「椿太郎くん！」

「椿鷹史です部長」

「そうか！ それでは椿鷹史君！ この作品、今度の新人賞に出してみないかい？ 一次通過は堅いと思うんだが、どうだい？ うん？ うん？？」

「うん、私もこれなら良いところまでいけると思うよ。人物も立ってるし、さつき椿くんが言ったた雰囲気もちゃんと出せてる。何より読んでいて展開が飽きないもの」

隣の副部長までもが絶賛しているその作品。恐らくこの場にいる生徒は全員が評価シートにA以上を書き込んだはずだ。俺だってそうした。まあ、正直俺の好みではなかったが、そうして一人だけ低い評価を付けたとかになると注目を浴びそうだし、理由なんて聞かれたらとてもではないが答えられない。

すると部員たちから賞賛の視線を浴びた椿がすつと席を立ち上がった。

「ありがとうございます。正直ここまで評価を貰えるとは思わなかったんで、すごい嬉しいです」

椿は俺と同じ二年生だ。背丈は高く180はあると以前誰かと話していた。髪は黒髪ショートで、どの運動部においてもおかしくないような爽やかなスマイルが特徴的な男だ。

「強いて欠点を挙げるとすれば表現力不足かな。もつと違った表現とかあったんじゃないのって思う部分はあるわね。けれど、それが作品の面白さを損ねているわけではない。ストーリーとキャラクターがしっかりしている証拠かな。どんどん先へ引つ張るテンポの良さがあるわ」

「これだけ一癖二癖ある部員たちが口をそろえて評価しているんだ、自信を持ちたまえ椿君！」

「ありがとうございます。少し自信がつけました。これからも精進します」

そんな当たり障りのないことを椿が言うと、部員全員から賞賛の音が贈られる。つられるように俺も手を叩いた。

喝采が響き渡る中、一人の二年生部員が手を挙げて言った。

「そういえば、部長の作品は今回見かけませんでしたけどどうしたんですか？」

確かに部長の作品は見かけなかった気がする。毎回必ずといっていいほど三作以上は書いてくるのに珍しいこともあるものだ。

部長はその生徒を指差して快活に答えた。

「おおーうよくぞ聞いてくれた！ 私が今書いているのは長編でねえ。生憎批評会に持つてくるには長すぎるのだ」

なぜかそれを得意げに話す部長。確かに批評会は提出された作品を部員一人一人が一时间ほどかけて読み、その後評価シートを記入していくというものだから、長編では不向きだ。

「まあしかしそれももうすぐ一段落するところだ。それが終わったら、また嫌というほど俺の愛しい孫たちを見せてやろう！」

質問をした生徒は目を輝かせて頷いた。

いちいちうるさい部長だが、彼の書く小説は俺も結構好きなものが多い。精一杯生きている人間を描くのがとても上手で、密かに勇気を貰っていた。

そんなこんなで時刻は十九時を回ろうとしていた。うちの学校は二十時完全下校だからまだ少し余裕があるが、月に一度開かれる批

評会では終わり次第解散となる。

そんな俺の思考を読んだかのように、部長が部員全員を見渡して言った。

「さて、それでは今回の批評会はここまでだ！ 皆ご苦労！ また来月、面白い小説を期待しているよ。それでは各人解散！」

「お疲れ様でしたー」

挨拶が終わり、生徒がそろそろと進路指導室から出て行く。

ようやくこれで今日も終わりだ。帰りに本屋にでも寄っていかうか。そういえば加奈のやつから漫画買って来いって言われてたっけ。バイトもしてない高校生に厳しい注文だが、まあいいだろう。どうせ本屋に寄るついでだ。

俺は開放感に満ちた軽快な足取りでドアへと向かった。

「桜井君。ちよつといいかしら」

こんな鬱々とした学校という牢獄からようやく出られるとせいせいしていた俺の心に水を差したのは、副部長のそんな声だった。呼び止められた俺の横を次々と部員が通り過ぎていき室内は俺と副部長の二人だけになる。

彼女はまだ座ったまま集めた評価シートを一枚一枚集計しているようだ。批評会ごとにその結果を集計して文芸部専用ノートへと書き留めるのは副部長の仕事だったようだ。いつも見るだけだった俺は誰がやっているかなど全く気にしていなかった。

「はい、なんでしょうか」

「なんでしょうか、じゃないわよ。君がこの文芸部に入部してからもう一年半にもなるけど、私未だに君の作品を見たことがないの。私がかたまたま休んでいただけなのかしら？ そんなわけないよね。だってこの評価一覧ノートにだって一度も名前が出てこないもの」

その質問に、俺は特別驚きもしなかった。なんとなくそんなことを言われると予想していたからだ。

「批評会への作品提出は、希望者だけですよね」

俺がそう言うと、副部長は手を止めこちらを向き真正面から睨ん

だ。

「だから一度も出さなくてもいいだろうって、そういうことが言いたいのかな君は。悪いけど、そういういい加減な態度で部活に参加されると迷惑なのよ。だってそうでしょう？ みんな程度の差はあれど、自分が書いた小説をどうにか人に読んでほしくて、それで毎回決して甘いとは言えない人たちに舐めるように読まれる批評会に提出してくるのよ。そんな人たちの気持ちが分かる？ 分からないよね？ 一度も作品を出したことがない人が、他人に自分の書いた小説を読まれる気持ちなんて分かるはずなのよ。そしてそんな人が部員として近くにいて、当たり前のように他人の作品を評価する。正直、考えただけでも虫唾が走るわ」

「……」

分かつてはいた。普通部活というのは、どんな生徒でも大抵は居心地が良くて、学校生活での悩みの一つや二つ話せるような友人がいるものだ。同じ目的があってその部活へ入るのだから少なからず通じ合えるものはある。それゆえに仲が深まりやすいのだろう。けれど、俺には全く部活に参加することが楽しいなどという気持ちが芽生えていなかった。気心知れた友達もいないし、活動を楽しいと思つたこともない。それじゃあなんでこんな部活にずっと続けるのかと聞かれれば、それは本が好きだからで、やっぱり小説を書きたいからって答えるんだと思う。

俺は副部長のあからさまな嫌悪感に押されつつも、なんとか口を切った。

「誰もが、そうやって小説を完成させられるわけじゃありません」

「なにそれ、自分にはもう書けませんって言いたいのか？」

さらに邪険となる副部長。その長めの黒髪と赤い縁の眼鏡の奥から見える瞳に、油断すると気圧され尻餅をつきそうになる。位置的には俺が立って彼女は座っているのだが、彼女の威圧感はその差を埋めて余るほどの勢いだ。

「君がそんなことを思っているのなら、違う部活に移動してくれな

いかしら。書く気がない人がいつまでいても何も変わらないわ。そんなことより何か新しく始められて、自分でも出来そうな部活動に行っただほうがいいと思うの。どうかな？ 私の意見」

それは意見ではなくてもはや脅迫だろ、という言葉はもちろん飲み込む。

しかしここで本心を今言わなかったら、どのみち知らない部活で知らない人たちと知らない活動をしなければなくなる。そんなことは考えただけで寒気がする。ライオンの群の中に子犬を一匹放つようなものだ。上手くやっていけるイメージが全く浮かばない。

俺は少し大きめに深呼吸をし、意を決して言った。

「僕が言っているのは、自分にはもう書けないとかそういうことじゃありません。ただ、人にはペースってものがあるんです」

「なに、あなたのペースは4年に一作書くペースだとも言う」

「少しは僕の言うことも聞いてください！！」

自分でも驚くほど大きな声がでてしまった。副部長の顔を見ると、先ほどまでの鉄面皮から初めて表情が変わった。目を見開き、驚愕に身をやつす。しかしすぐに先ほどまでの平静な空気を取り戻したようだった。

「俺だって小説を書きたい。いや、今だって書いてます。でも、それでも毎回どこか小骨が喉につつかえたような気持ちの悪さを感じるんです。例えそれが短いものであっても長いものであっても、途中で俺自身の気持ちが分からなくなるんです。本当に自分はこんなものが書きたいのかとか、俺って本当にこんなこと思っているのかとか、果てには、なんで俺は小説なんて書いているんだろうなんてことまで。そんなことばかり考えてしまうんです。そんな自問が意味を持たないことくらい分かっています。分かっているけど、それでも執筆に行き詰るとそんなことを考えてしまう。そうして悩んで悩んで悩みぬいて、いつも最後に残るのはどうしようもない虚無感だけです。そんな馬鹿みたいなことを何度も繰り返しているうちに、いつしか俺は物語を完結させることができなくなってしまうた。書

き上げることができなくなっていました。あなたにそんな気持ちがいに分かりますか？ 分かるわけがないんだ。頭も良くて、皆からも信頼されて、迷うことなく自分の書きたいものを書き上げることができあなあなたのような人には、僕の気持ちなんて……分かるはずがないんだ」

掠れた声と錯乱する意識で、最後のほうは自分でも何を言っているのか分からなかった。俺は無様にその場へたりこみ、熱くなる目頭を必死に押さえた。

副部長はじつとこちらを見つめたまま微動だにしなかった。何を考えているのかは分からない。呆れて何も言えなくなったのかもいれないし、怒りを通り越して哀れに思っているのかもしれない。

しかし彼女の瞳はしっかりと俺を捕らえていたように思う。そんな気がした。

そのままの状態でどれくらい時間が経つただろうか。気がつけばずっと沈黙を保っていた副部長が進路指導室入口付近へたりこんでいる俺に近づいてきた。もう何を言われてもいい。俺は聞くに堪えないような泣き言を全てこの人に投げつけたのだ。最早今となつては判決を待つ被告のようなものだ。どんな言葉でも受け止めようと覚悟を決めた。

「百聞は一見にしかずよ」

しかし彼女の口から出てきたのは、あまりにも情けない俺の弱音に対する非難でも、捨て台詞でも、もちろん慰めの言葉でもなく、高校生であれば誰もが知っているような、古来よりここ千乃国につたわることわざだった。

しかしなぜ今そんなことを言ったのだらう。意味が全く飲み込めない俺はただボケーっと阿呆のように彼女の顔を見上げるしかなかった。

「……はい？」

「……じゃ」

そのまま彼女は何も口にせず進路指導室を後にした。そこには俺

の干上がった昆布みたいな体だけが無様に置き去りにされていた。

2 - 3 (後書き)

第一章はここまでです。

読者の方々次第な部分ではありますが、筆者としてはこちらの桜井氏を主人公だと思っています。

今後ともお付き合い下されば幸いです。

3 - 1 (前書き)

第三章では今作の世界情勢や軍に係る事柄に深く触れられていると思いますので、かなり長くなると思われます笑
この章を通してこの作品の世界観を少しでも伝えていけたらいいなあと思っています。

できれば、皆様に娯楽を。

家庭科室へのドアを入るとそこは西城の書斎だった。床には真紅の絨毯が彩り、壁一面を埋め尽くすように飾られている賞状や棚に置かれた無数の楯からは数え切れないほどの勲章を貰ったことが見て取れる。天井からは小さめのシャンデリアがぶら下がり、向かい合って置かれたソファの艶は一級品のそれだった。

ここが花丸高校のもう一つの顔、武闘聖火高校。花高と同じ座標の異空間に千乃国軍が設立した術士訓練所だ。聖高に通う生徒たちはこちらの異界側に作られた専用の寮に入るか、現界から花高にあるターミナルポイントを通って通うことになる。

聖高が設立された当初の目的は、ここ周辺では多く生徒が集まる花高に来る生徒の中で術士の素養が高いと判断された者に軍事的訓練を施し、術士として戦場へ送るというものだったようだ。今では花高に入学していない者でも千乃国中から次々と生徒を集めて術士を育成しているようだ。

聖高に入学した生徒は適性診断をされた後それぞれの学課に配属され、そこで軍へ入隊するまで訓練を受けることになる。しかし、訓練を受けると同時に各能力に見合った任務をこなすことが義務付けられ、花高のような平々凡々とした毎日とは真逆な、軍人と何ら変わらない過酷な生活を送ることを余儀なくされる。そしてある一定の能力を認められると学校を卒業し、軍へと派遣される。

つまり、ここ聖高に入学するといことは千乃国軍に生涯を捧げることとほぼ同意義となるのだ。

「まあ座って。二人ともコーヒーでいいかしら」

「僕はココアで」

「少しは遠慮しろ。お構いなく」

「ふふ、いいのよ。生徒をここへ呼ぶなんて久しぶりだわ」

西城は少し弾むような声でそう言いつつ手際よくコーヒーとコ

コアを淹れ、俺たちの前のテーブルに置いた。

「さて、何から話しましょうか」

西城が向かいのソファに座りながら言った。

その言葉を待っていたかのように、俺はずっと喉をつつかえていた疑問をぶつけてみた。

「その……なんで、俺のことを知っていたんですか」

それは俺が一番最初に持った疑問だった。俺は最高顧問で准将の肩書きを持つ西城のような、軍の上層部の人間から一目置かれるような実績を上げているわけではないはずだ。だから初めて俺の名前を呼ばれたとき、真っ先にその疑問が脳に浮かんだ。

しかし俺がそう言っていると、西城は少し驚いたような表情になる。

「あら、あなた自分がどれだけ千乃国軍で有名なのか知らないのね」「え?」

「はっはっは。名声なんてものには全く関心してもんがないんですよ、こいつは」

「名声って、俺はべつにそんな大したことは」

「二つ名まで付けられてよく言っぜ」

「それは他の連中が勝手に言ってるだけだろ！ ホント、いったい誰が勝手にそんな名前つけたんだ」

「そりゃあ俺だよ」

「お前かよ！ センスないなお前！」

なにが嬉しくて相棒に二つ名など付けられなければならんのだ。

しかも西城までが知っているとなると相当に広まっていると見える。こいつ呪うぞ。

「千乃国にある術士育成所の中でも最もエリートが集まるといわれる武闘聖火高校で、特一級を三つも取った天才。その実力に軍も、任務さえこなせばこの学校での訓練を続けていって言っているらしいわね。そんな待遇が認められる人なんてそうそういるものじゃないわ。それこそ私たちのような、顧問になるために訓練を受ける人以外ね。そんな異例な措置を取られているような人が有名になら

ないわけがないじゃない」

「はあ、そんなもんですかねえ」

「そんなものよ」

あまり有名になると悪いことが起こる気がしてならないのだが。

「そういうわけで、さつき柏木君が言ったとおり。これは軍からの命令よ。察しが良くて助かるわ」

西城は大量のミルクを入れたコーヒールをかき混ぜながらそう言った。

「やはりそうですか……では、先ほどの戦闘は」

「ええ、あなたの力を試させてもらったの。けれど柏木君は案外軍人肌なのね。裁きと言われれば抵抗もせず受け入れるなんて少し意外……避けることもできたはずなのに。いえ、私はむしろそれを望んでいたのに」

「……はは、自分でも少し驚いています」

俺があの一瞬間西城の動きを見切ったことを、彼女は気づいていたようだ。

相棒のアレンはともかく、西城にまで見抜かれていたのは予想外だ。いや、相手が相手なだけになんら不思議はないが。

「そしてその試験の結果、あなたは合格よ柏木州君。実力も軍人気質な性格も、察しの良さも今回の任務を安心して任せられそうね。

私が生徒コネクターであるあなたを問答無用で殺そうとしたとき、真つ先に軍を疑ったじゃない？ 残念だけど、それも正解。はつきり言つて今の軍の上層部は信用できないわ」

生徒コネクターは、表側の高校の生徒の中に術士の素養を持つものがいないかどうかを見極め、軍に報告するために派遣される生徒のことだ。生徒コネクターはどれか一つの課で一級以上を取った者から選抜される。俺もアレンもそれで選ばれたのだ。

「俺も最近の軍の動きには少し疑問を感じていました。特に外交において」

「そうね。今回の任務でも、もしかしたらその辺の事情が絡んでく

るかもしれないわ」

「その……任務とは？」

本題はそこだ。准将が直々に試験をするくらいなのだ。しかも外交問題が絡んでいるかもしれないというのだから、並大抵のことではないのだろう。

西城はしばらく無言を通した後、ふうつと息を吐いた。

「あなたには今回、イリアン帝国軍に潜入してほしいの」

「え……イリアン帝国ですか!？」

「ええそうよ。あの、善人が集まるなんて言われてる国、イリアン帝国。そこへスパイとして行ってほしいの」

アレンが驚愕のあまり持っていたカップを落としそうになる。その気持ちも分かる。俺も思わず声を上げそうになった。

イリアン帝国。千乃国の北に位置し国交も正常。千乃国が属するメイジ大陸内でも一二を争う親交深い国家だ。貿易も盛んで今日の千乃国に出回る商品にはイリアン製の物が非常に多く見受けられる。数百年前に国境を賭けた争いをして以来ずっと安定した外交が続いており、常に千乃国とセットとして考えられるため、二国は周辺各国にメイジ不動の親和國家とまで言われている。

そのイリアン帝国に千乃国がスパイを送る。これは予想を超える異常事態だ。

「そんな……何があったというのですか」

「これは私がある信頼できる筋から独自で得た情報なのだけれど」
西城は席を立ち、自らの机の上に置かれたプリントを取り俺たち
に差し出してくる。

俺とアレンはいぶかしみつつも、恐る恐るそれを受け取った。

「エイレーン大陸への進軍」

イリアン帝国のエイレーン大陸への進軍。そこには確かにそう書かれていた。

「北の大地、エイレーン大陸。聞いたことくらいあるわよね？」

「もちろんです。確か、金などの鉱山資源や化石燃料などが豊富の」

……そして、サンタマリアの丘がある場所。

「そう。その手に入れば莫大な国益をもたらすとして知られる土地、エイレーン。その土地がどの国家にも属さずいられたのは、大戦になることを懸念した世界の国々が暗黙の不可侵条約を結んでいたからなの。けれど……」

「その暗黙を……イリアン帝国が破ったのですね」

窓際に立って外を眺めていた西城はこちらを向き眉を潜めた。

「こんなことが世界中に広まれば、それこそ大戦が起こりかねないけれど連中の狙いは鉱山でもそこに眠る天然資源でもない。ましてやエイレーンを乗っ取るうなんてことも到底考えていないみたい」「どうしてそう言い切れるのですか？」

「その報告書をよく読んで御覧なさい」

そう言われて俺たちはさらにその先まで読み進めて行く。すると、西城が言おうとしていることが分かってきた。

「……なるほど。大規模に軍隊を送りつけるのではなく、中隊を一つ送るだけというわけですか。確かに侵略にはは小規模ですし、拠点を作るにしても数が足りない」

「そう。けれどその目的を見れば、その大陸に進軍するにはあまりにも少ない数にも納得がいくはずよ」

「……魔光石」

魔光石。度々噂されることはあるが見た者は誰一人としていないとされる、伝説の石。そんなものは与太話として一蹴される類のものだった。

「魔光石は実在するわ。存在を知っているのは極少数でしょうけど……あまりに危険すぎるのよ。西大陸に伝わる伝承を聞いたことがあるでしょう？」

貧民層の男がある日、奇妙な石を拾う。するとその男は性格が豹変し、彼が所属する小国家を一晚にして滅ぼしてしまった。今や術士を志す者であれば誰でも知っている御伽噺のようなものだが、西城の言い草はあたかもそれが実話であるかのようなようだ。

「それがエイレーン大陸中心部にあるらしいっていう噂も、やつぱり一部の人しか知らないの。もう古代兵器のようなものね。あれは人が扱うにはあまりに危険すぎる。それにそんなものがもし世間に晒されるようなことがあれば、魔法の存在が物的証拠と共に世界に公になってしまう。そんな事態、もう世界の終わりと言ってもいいでしょうね」

魔法の存在は世界中どの国でも軍事機密となっており、その認識だけはどれほど険悪な国家間でも共有されていた。魔法が世間に出回ったならばそれはすなわち、俺たちが暮らす世界の秩序が崩壊することを意味するのだ。国によって絶対的に管理し、秘匿されなければならぬ事項だった。そのための術士訓練所であり、俺たちのような生徒コネクターだった。

しかしここまで話を聞く限り、状況は俺が思っていた以上に切迫したものとなつていようだ。こんなことを俺のような訓練所に通う一学生に任せていいのだろうか。なにせ世界を背負っているようなものなのだ。国レベルで対応すべき事態のようにも思える。

「そうね。でもさつきも言っただけ、これは私が独自のルートで得た情報なの。それもイリアン帝国軍の幹部レベルにしか伝わっていないようなトップシークレット。千乃国軍上層部にも一切知らせていないわ」

「え、こんな大事なことをですか!?!」

「さつきも言っただでしょう。今の上層部は信用できない。不可解な動きが多すぎるもの」

「それでも!」

「それに」

彼女はそこで再びソファへ戻り、俺の目を真っ直ぐに見つめてくる。その様相には今までとは違い鬼気迫るものがあった。眉を潜め、瞳の底光に僅かな気迫を忍ばせる。

「これはどの国家にも露呈されないように、イリアン帝国が秘密裏に遂行しようとしているもの。その運用は維持しなければならぬ」

の。つまり、こちらがそれを阻止するにしても、あくまで秘密裏に行わなければならぬ。裏のことは裏で解決しなければならぬ」
ピンと張り詰めた空気が書齋に漂う。アレンはさきほどからじつと話に聞き入っているようで、一切口を開かなかつた。

「私が何を言いたいのか……分かるわよね？」

「……その秘密裏の任務を、俺がやるってことですよね」

そんな世界の秩序を脅かすようなことを阻止するのが、この俺。
「そう。もちろん魔光石をイリアン帝国軍が手に入れてどうするの
かなんて分からないけれど、あんな危険なものはこの世にあるべき
ではないから。軍でも正式な地位を受けていなくて、他国にもその
顔を知られていない。けれどどんな任務でも確実にこなす、貴方の
ような暗躍のスペシャリストが必要なのよ。血戦知らずのジョーカ
ー、がね」

「……それでは、俺の任務というのは」

「魔光石の回収よ」

西城は凜と言い放った。

つまり俺は、世間に出回ると危険極まりないその魔光石を回収し
て自国へ持ち帰らなければならぬのか。目的が魔光石でなくとも
イリアン帝国は、そんな世界の火薬庫のような土地に自国の軍を送
り込もうとしているのだから、それだけでも十分異常事態。それに
それがイリアン帝国軍の中でも秘密裏に動いているという。そうい
った秘匿情報の裏には大抵、何か良からぬことを企む者の謀略が息
を潜めているものだ。それを、こちら側からも秘密裏に潰すという
西城の考えは確かに筋が通っている。

しかしどうだろう。俺が潜入するイリアン帝国軍。あちらからし
てみれば、俺たちは彼らが奪略を目論んでいたその魔光石を横取り
した唾棄すべき国として認識されてしまうのではないだろうか。そ
うすれば、今まで国交を深めてきた二国間に重大な溝を作ってしま
うのではないか。それに……

「承知しているでしょうけど、魔光石を横取りしようというのだけか

ら、敵軍との戦闘は避けられないわ。それにそれはただの戦闘ではなく、全員殲滅を余儀なくされる戦闘となるでしょうね。イリアン帝国軍から千乃国軍が魔光石を奪っただなんて報告されては一大事だもの。それに万が一その部隊の消失の原因が感付かれていても、向こう側もそれを公にはできない」

「殲滅は承知していますが……それより、その」

「ふふ、殲滅は承知している、か。頼もしい限りね。そんな貴方がこの任務に対して躊躇する理由は」

彼女は顎に手を当て考えるような素振りをする。しかしその表情はもう分かりきっているような、明快なものだ。

「『こいつが魔光石を奪おうとしているんじゃないか』そう思っているのね」

「……すみません」

俺がそういうと、西城は強張った表情を少し緩めた。

「謝らないでいいのよ。その読みの鋭さもまた、私が柏木君を選んだ理由の一つなのだし。だから無理には言わないわ」

西城はそこで口をつぐんだ。その様相は俺の答えを待っているかのようなのだ。

「……その、少し質問をいいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

「イリアン国内でも軍のごく一部の人間しか知らないような情報を、どうして貴方が知っているのでしょうか」

そう、ここまで話を聞きその点だけはどうしても腑に落ちなかった。他国のトップシークレットの情報を得ることなど並大抵な者にはできない。目の前にいる西城が肉弾戦において並大抵の者ではないことは周知の事実だが、情報戦となると話は別だ。イリアン帝国は決して秘匿情報の漏洩などというマネを平気でしてしまうような緩い国家ではない。様々な国籍の者を受け入れる寛容さを持つてはいるものの、締めるべき部分はこの上なく厳重にされていると聞く。そう、例えば軍事活動に纏わるような情報は特に。

その情報を西城が、千乃国軍全ての人物の目を掻い潜り独自に得ることができたという事実は、どうしても納得がいかなかった。

もし彼女が自らの野心のためにこのような任務を言ってきたのだとすれば、今ここで戦闘になりかねない。秘密を知って尚自分に協力しないと知れば必ず俺たちを消しにかかるだろう。それ故この言葉の裏にはかなりのリスクを背負っていた。

しかしそれでも、その点だけはどうしても確認しておきたかった。だから俺は噴火口の縁に乗っている思いでその疑問をぶつけた。

俺が心中で臨戦態勢を整えつつ返答を待っていると、しかし西城は予想に反して表情を変えないまま平然と口を切る。

そしてその口から驚くべき答えが返ってきた。

「イリアン帝国軍には、私の部下を数人スパイとして送り込んでいるの」

「「なッ！」」

思わずアレンと声が被ってしまった。今まで沈黙を保っていたこいつも相当に驚いたようで、目を丸くしている。

そのアレンが身を乗り出して聞いた。

「ぐ、軍の許可は！」

「そんなもの当然ないわ。あくまで私個人が頼んだだけ。イリアン帝国は確かに堅牢な情報保護をしているけれど、国が多国籍なこともあって軍への志願者を受け入れる間口は広いのよね。私が見込んだ部下の経歴をちよちよっといじって送り込んだら、みるみる出世してくれたわ。その彼女からの情報で、私はその情報を得ることができた」

正直、言葉が出なかった。こんなことがバレたらそれこそ国際紛争に発展しかねない。肉弾戦においてだけではなく、この人は情報戦においてもその才気を発揮するタイプのようだった。

「これで解決かしら」

西城は足を組み、口の端を少し吊り上げるようにして妖艶な眼差しを向けてくる。

しかし確かにそれなら機密情報を知っていたとしてもおかしくない筋が通る。それにそのスパイという人が本当にいるのか、などと言い出してしまえばたちまち水掛け論と化してしまうだろう。准将ともあろう彼女が俺のような階級すら与えられていない者の意志を尊重してくれたのはそれだけで恐悦至極なことだった。

そしてなにより、俺が西城と同じ立場だったとしても、こうして裏方で実力を発揮するような者に阻止させるだろうことは容易に想像できた。

承諾するための材料は、全ては揃った。

「分かりました。その任務、受けさせて頂きます」

「ありがとう。本当に感謝するわ」

俺とアレンは目を合わせると、軽く頷いた。

「それで、俺たちはどうすればいいんでしょうか？ 姐さん」

「だから姐さんはやめろって」

室内には大きな振り子時計のカツカという音が響いている。時刻は正午を少しばかり過ぎたところだ。窓の外から見える空では太陽がこれでもかというほどギンギンに照らしつけている。こうした景色を見ると、時折こちらが異空間である事実を亡失させてしまいうことになる。

俺がそんなことを考えていると、西城はこちらの目を覗き込むようにして言った。

「任務は柏木君一人で行ってもらおうわ」

「ちよ、そりやねーっすよお！」

「中隊一つに潜り込んでその殲滅。迅速な行動と洞察力、判断力、スパイとの連携、敵を出し抜く和事も必要なのよ。残念だけど、アラム君には少し荷が重い」

「でも！」

「これは命令よ。異議は認めないわ」

西城の対応は頑なだった。正直俺も今回に限っては一人のほうが動きやすい。

「……分かりました」

アレンは歯がゆい思いを顔に滲ませる。

こいつの気持ちも分からんでもない。俺だって相棒が重要な任務を託されている傍らで自分がのけ者にされるなどという事態は腹に据えかねるはずだ。

「それでアラム君にはまた別の任務があるのだけれど、お願いできるかしら？」

その様子を見た西城がカップをかき混ぜながらそう言う。

しばらく眉間に皺を寄せていたアレンだったが、やがてふっと表

情を緩めた。

「はい、任せてください」

アレンは元気よく返事をする。両手で作った拳を膝に置き背筋をピンと張った。

「頼もしいわね。任務にここまで貪欲だなんて、貴方は柏木君とは違う意味で軍人氣質なのかしら」

「こいつはただ面白そうな任務を好むだけですよ」

「ちょ、なんだよそれ。まるで俺が軍務を遊びとして考えてるみたいじゃねーか」

「違ったか？」

「違えよ！ ただその任務の過程に価値を見出したいといういか」

「……同じようなものではないか。」

「さて、柏木君。貴方にはこれからイリアン帝国へ行って私が送ったスパイと合流してほしいの」

「これから、ですか。それはまた急ですね」

「ええ、むしろ今からでも遅いくらいなのよね。今回の任務は時間が命だから、遅れてしまったら一巻の終わりなの」

「……そんなに余裕がないんですか」

「そう。だから柏木君には悪いのだけれど、詳しい説明は向こうでそのスパイの子に聞いて」

「了解しました」

「ああ、貴方の任務服と戦闘用具一式、そして今回の任務に必要なものはもう準備しておいたから」

西城がそう言うと、入り口から執事のような男がトランクを持って入ってきた。

とことん抜け目のない……絶対敵には回したくないタイプだ。いや、最高顧問ともあろう人を敵に回すなど考えたくもない状況だが、俺は礼を言いつつトランクを受け取る。

すると西城は隣の部屋へ続くドアを指した。

「今あそこを学校裏のターミナルポイントと繋いだわ」

「ありがとうございます」

俺がそう言っただアを開けると後ろからアレンが神妙そんな声で言う。

「……お前なら出来るさ」

「はは、そんなならしねえ顔で言われても説得力ねえよ」

「な、なんだとお」

俺は向き直ると右拳をアレンのみぞおちへグツとあてる。

「お前は自分の任務をしっかりやれ」

「んなことためーに言われなくなつて分かつてるっつーの」

「はは、そうか」

「……死ぬなよ」

そう言っただアレンも拳を突き出す。俺たちはそのまま拳で相手の心臓から感じる鼓動を確かめるようにして決意を固める。それは今まで幾度と無く過酷な戦場で行つてきた、魂の誓いだった。

「西城様。お時間が」

「少し待ちなさい。戦友が互いの命の無事を願い、誓い合う。いわばこれは儀式なのよ。無粋なマネはしてはいけない」

窓から入る強い日差しと蝉の声に混ざつて聞こえてくる聖高の生徒たちの声や爆音。

西城の書齋を包む心地よい静けさは、活気ある武闘聖火高校からこの一室だけをひときわ鮮やかに切り離していた。

千乃国とイリアン帝国の国境にある検問所で偽造パスポートを使い悠々と入国した俺は、首都から少し離れた駅で光車を降りた。

それと同時に肌寒い冷気が全身を襲ってくる。千乃国にとって最も親交深い国なだけあり、ここは軍に所属する俺のような人間には今まで無縁の土地だった。その上イリアン帝国はメイジ大陸の最北端に位置する国であり、その北には海を挟んでエイレーン大陸があるだけだ。今まで軍務をこなしてきたのは、どれも千乃国の東方か南方の国が多かったなので、このような寒い気候はどうしても苦手だ。

駅のホームを足早に歩き改札を通り駅を出る。眼前には可愛らしい少女のオブジェを中心に据えた噴水が出迎え、駅前公園のような場所が広がっており、点々と置かれたベンチや木々の周辺には家族連れや恋人のような姿も目に付く。その中に小さめの時計台があったので確認してみると、もう少しで二時を回ろうかということだった。三戸羽琉市からここまでを約一時間半で移動できるとは、光車の動力にはなんらかの魔術が使われているのではないかと妄想を広げてしまう。

しかし西城から言いつけられた待ち合わせ時刻は六時だ。まだ大分時間がある。とりあえずここにあるという軍本部と併設された訓練所へと行ってみるとしようか。もう中隊長の名前と顔は割れているのだ。こちらの軍の規模と実力のほどを見ておくためにも、一目見ておくのは良いかもしれない。

「じゃーちよつと隊長殿の顔でも拝みにいきますか」

俺は、案内板で訓練所の位置を確認し街中を縫うように歩き出した。

道行く人を見てみると、確かに多国籍国家であることを思わせる様々な人種の人々が住んでいるようだ。肌の黒い者、白い者、体の大

きい者、小さい者、髪が金色の者、黒色の者、ありとあらゆる種類の人間が街中を行き交っていた。

肌寒い空気に震えながら十分ほど歩いたところで、訓練所らしき場所が見えてきた。辺りは煉瓦と柵で覆われ、中の様子は確認できないようになっていた。門には武装した兵士が四人で陣取っており、不審人物がいなか目目を光らせている。見た限り何も武器を持っていない術士と思われる人物が二人、銃を持った陸軍兵士らしき人物が二人といった組み合わせのようだ。

俺は少し離れた藪に隠れ、魔力の気配を感じられないようにしつつ手早く不可視化の術を発動させる。それと同時に状態空間を俺を中心とした半径五メートルまで広げる。見た限り術士の二人はそれなりのレベルのようだが、今の俺を感じ取るには到底至らないだろう。術士の實力とは、いかに自らの魔力を制御する力を持っているかということでもある。その点であの二人は、そこそこの魔力を持つてはいるようだが、それを制御もなしに垂れ流しているようでは話にならない。

術式を展開し終えた俺は先ほどまでとは打って変わって、堂々と正門前へと出た。案の定、わずか一メートルほどの距離にいる俺の姿に四人全員が気づく気配はなかった。

そのまま正門を通過する。すると中は、無駄に広い射的場や戦闘訓練場が左右に大きく広がっていた。ちょうど今、訓練の真っ最中だったようで火薬の匂いと緊迫した空気が敷地内に充満している。その人ごみに紛れてその様子を見てみると、術士と兵士が混同された三対三の編隊戦の訓練をしているようで、使用している術式を見る限り術士が使用しているのは魔術のようだ。炎や氷の攻撃魔術が飛び交い、それらは双方の魔術師が形成する防御陣によって弾かれる。そんな中を銃とグレネードを持った兵士が交戦する。その様は本物の戦場を彷彿とさせる光景だった。

「すごい……」

ここまで実践向けの訓練は千乃国でもしていないだろう。もしか

したらイリアン帝国と千乃国が戦争になったら、軍の熟練度という意味ではイリアン側が優勢になるのかもしれない。その光景に若干気圧され気味だった俺は、そんな良からぬ妄想を思い浮かべてしまった。

訓練の様子をしばらく見た後、俺は帝国軍本部のエントランスへと入った。中は石造りで現代の建造物とは到底思えない。もはやこれは旧時代の城といったほうが近い内観だ。しかし部署の配置などは現代のそれで、軍人が上官へのコンタクトをとるための窓口や外来者専用窓口なども設けられていた。

中隊長の名前はマシュー・デイリアン。軍では大佐という地位らしいが、その実力は俺のような、裏でその才覚を發揮する暗躍専門として上層部からの信頼は厚いらしい。

この広い建物の中でその人の執務室を探すのは非常に困難だ。軍の訓練の様子を見た今、出来ればさらっと顔だけ見て退散したかったところだが……

「……仕方ないか」

俺はあらかじめ準備されていたイリアン帝国軍の軍服に着替えると、術を解きカウンターへと赴いた。

「お疲れ様です。自分はイリアン帝国軍本部第七小隊所属、隊員番号160788、瀬田幸之助二等兵であります。マシュー・デイリアン大佐への面会をお願いしたいのですが」

「瀬田幸之助さんですね。少々お待ちください」

俺が教えられた定型文通りに申し出ると、受付の女性は手馴れた手つきで手元のパソコンを起動し、こちらのデータを参照しているようだった。「瀬田幸之助」などという名前では千乃国の人物だと丸分かりだが、その女性は動じた様子の欠片もない。外国人など珍しくない、本当に様々な国籍のものが志願者として集まっているのだと実感する。

「データ一致しました。引き続きIDカードのご提示をお願いします。それと、少佐以上の階級の方との面会は、所属する部隊の上官

からの紹介状が必要となりますが」

「承知しております。こちらを」

俺は西城から受け取っていたIDカードと紹介状を差し出した。

「……認証完了しました。只今ディリアン大佐へ確認を取りますので少々お待ちください」

甘くもきつくもなく、至って平坦な声音のその女性はその場で受話器を取って連絡を取り始めた。しかし確かにこれほどのセキュリティであればスパイでも送らない限り潜入することなど不可能だろう。これだけ堅牢なセキュリティをいとも簡単に破る西城の手回しの良さと、これほど重要な紹介状を書けるほどに信頼を得ているスパイからは並はずれたものを感じずにはいられない。

受付の女性は一言二言交わただけで、すぐに受話器を置いた。

「お会いになれるようです。こちらが面会許可証になります」

妙にあっさりとしている気はするが、気にしていても仕方がないだろう。

俺は差し出された、その千乃国の運転免許証ほどの許可証を受け取る。見るとそこにはディリアン大佐の執務室の場所も書かれていた。

「ありがとうございます」

俺は一礼し、記された執務室へ向かった。

建物は十三階建てだった。デイリアンの執務室は八階にあるとのことだったので、俺は石造りになっていて内観にはあまりにも不釣り合いな現代文明の産物であるエレベーターに乗り八階まで昇った。

エレベーターを降り辺りを見回すと、歩き出すのもうんざりするほど広く、突き当たりの壁が見えないほどに長い廊下が続いていた。訓練中ということもあってか歩く人物はほとんど見当たらない。これほどまでに広いのに閑散としていると、無機質な石の冷えも手伝って再び寒さがこみ上げてくる。

俺は早くことを終わらせようと、壁側に軒を連ねる部屋の将校名のプレートを確認しつつ急ぎ足で廊下を歩いていく。そこには軍に所属しているような者ならば誰もが知っているような超大物将校の名前もあり、胃がねじれるような緊張を感じると共に、仄かな任務への武者震いのようなものがこみ上げてくる。追い詰められれば追い詰められるほど火力を増すその不思議な炎の熱が体内を巡り、血が沸騰するような感覚に陥る。

そのまましばらく歩いていくと、シルバーのプレートに『マッシュー・デイリアン』と彫られたネームプレートが埋め込まれている部屋を見つけた。

俺はその時代を感じさせる木製の扉の前で深く深呼吸をする。ここまで何一つ不都合なく来れたのだから、きっとあちらにも話は通っているはずだ。いや、今となってはもうそう信じる他はない。意を決して扉を叩いた。

「失礼いたします。イリアン帝国軍本部、第七小隊所属、瀬田幸之助二等兵であります」

……。

そう言って暫く待っても返事がない。一時的に席を外しているのだろうか。

「大佐殿。ご不在でありましょうか」

先ほどよりも大きめの声でもう一度聞いてみるがまたもや返事はない。やはり一時的に席を外しているのだろう。それならば既にコンタクトは取ったのだから入って待っていても問題はないはずだ。何よりこの廊下は尋常ではないほど寒い。

そこに思い至った俺は、その古い木製の扉を手早く開けた。

瞬間

「っ！！」

扉を開け放った正面には無表情のまま剣を横に一閃しようと構えるデイリアンの姿があった。更に左右からは紫色の術式がこちらを狙い動きを封じる。くっ、”縛り”の術か。

「ふっ！」

居合いと共に剣を一閃させるデイリアン。

油断していたほんの一瞬を捉えられ動きが封じられた俺は、反射的に”解呪”の術を走らせると一気に後方へと跳んだ。前髪を数本持つていかれたが紙一重でデイリアンの黒光りする剣先をかわすことに成功する。

「……へえ、解呪のスピードが普通じゃないな。仙術……いや、君のは妖術かな」

「……だつたらなんでしよう」

「はは、褒めているんだ。少しは喜んでいいんだよ。妖術を使える術士なんて世界にそう何人もいるものじゃないからね」

緑色のリーアに白銀の長髪をはためかせていたデイリアンは、どろろというわけかそこであっさりとリーアを解いた。同時に剣を鞘に収め、その表情から緊迫の色が消える。

「驚かせてすまない。君がどの程度の実力かを知っておきたかったんだ。まあ入りたまえよ」

デイリアンは何事もなかったかのようにそう言うと、部屋の中へと招くように手を差し出した。その風貌は写真で見たより若干若く見える。肌は白く体つきも華奢で、一軒すると千乃国のホストクラ

ブで働いていそうな印象を受ける男だ。

しかしつい今しがたの動きを見る限り、只者ではないことは想像に容易い。上級魔術である”縛り”の術式を発動させると同時にあれほどまでに鋭い一閃を繰り出す体力と精神力、器用さを兼ね備えているのだ。確かに暗躍する者としてはこの上ない才能だろう。同業者として甚だ恐ろしい。

俺は腰に据えた愛剣といつでも術式を組める魔力という二つの武器をいつでも取り出せるように精神を研ぎ澄まし、ディリアンの部屋へと踏み入った。

「……では、失礼します」

入った途端また何か畏が発動するのではないかと身構えていたが、その懸念は杞憂に終わった。ディリアンは自席に着くと腕を組み痛快な表情を浮かべた。

「君が椎名が言っていた瀬田幸之助君か。確かに報告通りの実力のようだな」

「はっ！ 恐縮です」

畏が発動した直後はスパイのことがバレたのかとも思ったが、どうやら本当に腕試しをしただけのようだ。こちらの軍の例に倣うことは継続しなければならない。

しかし西城といいこのディリアンといい、最近では部下の腕試しをするのに突然殺しにかかるという行為が流行っているのだろうか。正直命がいくつあっても足りる気がしないぞ。

いや、それにしても……

「うん？ どうした。言いたいことがあるなら言ってみるといい」

「はっ！ では恐れながら申し上げます。大佐殿は先ほどの一閃にて私が回避行動に失敗した場合、どうするおつもりだったのでしょうか」

「はっは。面白いことを聞くな君は。そんなの決まっているだろう、死んでもらっていたよ。先ほどの私の攻撃をやり過ぎせないような者に今回の任務は無理だ。なにせあの守護獣がひしめくと噂される

アーティクの森を通り、エイレーン大陸中心部へ行こうというんだ。凡兵の入隊など無用だ」

「はっ！」

「まあ、あの方法で生き残った者など片手で数え切れる程度だけだね」

……なるほど。ここに所属する軍人は、本当に日々を命がけで送っているわけか。どうりで訓練も活気付くわけだ。

「はっ！ 愚問でした」

「そうかしこまらなくていいよ、楽しんでくれ」

「……ありがとうございます。それでは、お言葉に甘えて」

俺は少し緊張させていた体をほぐす。世界的に夕テの関係にうるさいと有名な千乃国軍よりも、さらに厳格な上下関係が組みまれていると聞いていたイリアン帝国軍だが、それでもないようだ。

いや、流石にこのイリアンが変わっているだけか。

「私は強い者は好きなんだ。よくもまあ君のような者が出世もせず二等兵なんぞに埋もれていたものだね。私の大隊に入れたいくらいさ」

「光栄です」

「本当にそう思っているかい？」

「はい、もちろんであります」

「はは、結構結構」

するとイリアンは座ったまま少し表情を締める。

「うん、決まりだ。今回の任務に君の参加を認めよう。私の不意打ちをかわした者なんて久しぶりだね。初め椎名から二等兵の推薦がきたときにはどこぞの馬の骨かと思ったものだけだ……なかなかどうして節穴じゃないものだな、彼女の目も」

その最初の一撃をかわせなかった者はどうなったのか、など聞くまでもないことだろう。この軍には絶対に入りたくない。

「それで、私は中隊のどこへ配属されるでしょう」

イリアン帝国軍の中隊は三つの小隊と中隊長直下の兵100人ほ

どで形成される、千乃国のそれよりも大分少ない人数と聞いた。俺としてはなるべく人数が少ないほうが身を潜めるには都合が良いが

……

「うん、君にはその中の第三小隊へと行ってもらう。二等兵という階級では何かとやりづらいだろうからね。小隊の上、君を推薦した椎名が隊長を努める隊だから、そのほうが君としてもやりやすいだろう」

「はい、お気遣い感謝します」

「ああもうこんな時間か。詳しい任務の詳細はこの後四時から行われる幹部会で話す予定だ。残念ながら君に参加させるわけにはいかないが、会議終了後、椎名から隊員に向けて説明があるだろうからそこで聞くといい」

「了解しました」

「それでは、よろしく頼むよ」

「はっ！」

立ち上がったディリアンと俺は向き合い、握手を交わす。

同時にディリアンが掌を介して忍ばせようとしてきた術式を俺は静かに解呪する。

静寂が包む昼下がりの廊下で、俺たちは一層手に力を入れ、形だけの笑みを交わした。

「ばっかじゃないの！ そんなに死にたいなら光車こうしゃの窓から顔出して一人我慢大会でもしてれば？ 一分くらいで窒息死できるはずよ！」

「あ、そういえば光車って千乃国と帝国が共同で開発したらしいですね。あの早さには驚いたなあ、線路脱線するんじゃないかって不安でしたよ」

「あたしが言ってるのはそんなことじゃないの！ 勝手にディリアン大佐なんかに会いに行つて死ぬつもりかって言ってるの！」

現在時刻は午後六時半。六時五分ほど前に待ち合わせのバーに着いた俺はカウンター席の端で合流する予定のスパイの女を待っていた。酒の匂いが店内に充満しておりその匂いだけで酔ってしまいそうになる。辺りの席には若い大学生ほどの集団や一日の仕事を終えたサラリーマンと思しき人々が次々とやってくる。こんな空気は極秘任務の打ち合わせを行う場として、任務前の未成年が吸う空気としてあまりに不適切ではなかるうか。

アルコールの匂いに頭をクラクラさせながら十分ほど待っていると、店の入口でカランと音がなった。視線を送ると黒髪を後ろで一つに束ねた女性が凜とした空気を纏いこちらに向かって歩いてくる。一瞬気づかなかったが、その顔はよく見ると資料に載っていたスパイの女だったので、俺は立ち上がり出向いた。昼間見たような過酷極まる訓練をこなしているとは到底思えないほど清楚な出で立ちをしており、写真で見たよりもかなり若く見えたため俺の胸に若干の緊張が走る。ディリアンといいこの女といい、資料の写真というものは案外当てにならないようだった。

するとその女性、椎名美鈴しほなみすずは俺の顔を見るなり大きな紅葉マークを俺の左頬にお見舞いしてきた。わけも分からない俺はその場でしばし膠着じゅうちやくした後、酒の肴さかにしていた見物客の視線を背後に受けたま

ま席へと案内することになった。

以来ずっと苛立たしい様子で沈黙を保っていた彼女なのだが、口を開いてみた途端この調子だ。初対面にしては少し遠慮がなさすぎる。千乃国の信条とは気遣いと思いやりだというのに……。

「いえその、少し時間があつたから隊長の顔でも見ておこうかと思いまして……それにいきなりの入隊なんて怪しまれますから、トツプを信用させればその後なにかと動きやすくなるでしょうし」

「『時間があるから隊長の顔でも見よう』っていう考えがそもそもおかしいのよ！ あたしを含むスパイの人たちが今までどれだけ必死にお膳立てしてきたと思ってるの？ あんたに死なれたら全てがパーなのよ！ 私たちが得た信用を少しは信用しなさい」

「それは……すみませんでした」

彼女が言うにはあのマシュー・デイリアンという将校は、行き過ぎた訓練で相当数の部下の命を奪っている超スパルタな上官らしい信頼を受けている上層部からもその行いについてだけはあまり良く思われていないようだ。だが、当の本人はそんな上からの圧力には全く屈しない独立心を持っているようで、一貫してあのスタイルを貫いているのだという。

先ほどまでずっと怒りに身を震わせていた椎名はやがてふっと息を吐き、気を取り直すように言った。

「まあいいわ。死ななかつただけよしとする。それより」

彼女はそこでカウンターに向けていた体をこちらに向ける。その整った顔立ちにまじまじと見つめられ、一瞬心臓が跳ねるような鼓動を打つ。

「自己紹介がまだだったわね。あたしは椎名美鈴。もちろん偽名だけれどね。こつちでは少佐の地位を貰っているわ」

「俺は瀬田幸之助、二等兵っていう地位らしいです」

「血戦知らずのジョーカー、かしわきしゅう柏木州君が二等兵かー。なんだか不思議な感じね」

「その名前……」

なんでこんなところにまで広まってるんだよ。この件に関しては明らかに誰かしらの悪意が絡んでいるようだ。この任務が終わったら真っ先に特定しなければなるまい。

「瀬田君はあたしより二つ年下なのね。同い年くらいに見えるけれど」

「俺もびつくりしましたよ。写真で見た限り大人の方だと思っただので」

「ふ〜ん。じゃあ二人のときくらい敬語なしでもいいわよ」

「え……」

「なによ」

なにが『じゃあ』なのかは分からないが……まあ、本人がそう言っているのだ。断る理由もなからう。

「……ああ、分かった」

「よろしい。それじゃあとりあえずさつき終わった幹部会の話ね」

「いやちよつと待って。椎名は小隊長なんだから、それは隊員全員に説明することじゃないのか？」

むしろ隊長である椎名が今こうしてここにいること自体まずいのではないかという疑問が今更ながらに浮かんできた。

「ああ、幹部会であたし隊長辞退しますって言ったのよ。デイリアン大佐も何も言っていなかったわ。だってそんな立場じゃ動きづらいじゃない？ 隠密行動には平の隊員が一番。代わりに隊長になった奴には全部説明しておいたしね」

「そう……か」

実のところ、俺も裏で動くのに隊長という地位はどうかと思っただので、椎名の考えには全面同意だった。隠密行動とは、如何に相手の目を欺き任務を遂行するかという点が肝となる。スパイとの連携は今までも散々行ってきたが、全て相手側のやり方に合わせるように動いてきたため、こうして自然と共同歩調が取れるような相手は新鮮であり頼もしくもある。

「いやでも、待ち合わせはどこでもいいけど、流石に軍の一部しか

知らないような任務内容を、こんなに人が溢れてる場所で話しちやまずいだろ」

「そこは柏木州君お得意の幻術でなんとかして。あたし任務の前はこのバーボン飲むのが日課なのよ」

「任務前に酒なんか飲むな！ それに俺、幻術はまだ見習いレベルだよ」

椎名は俺より二つ上だから十九だ。イリアン帝国では酒は十八からと聞いたことがあるが、まだ未成年の軍人が任務前にウイスキーを飲むなんて言語道断だ。

「ああ、君は妖術だっけ。すごいわよねー妖術使える人なんて他に聞いたことないもの。まあそれでなんとかしてよ」

「……」

この女、本当に今回の任務の重要性を分かっているのか。頼もしさを感じはするが、同時に先行きが不安にもなってきた。

「それで、幹部会の内容なのだけれど」

椎名はいつのまにか頼んでいたグラスを一気に空にすると、俺の気などお構いなしで話を続ける。仕方がないので俺は状態空間を俺と椎名を取り囲むように展開させ周りに音が漏れないようにする。

「出発は今夜の八時。まず光車に乗って最北の駅ヴィネージへと行く。けれど一度に中隊員全員が乗り込むわけにもいかないから、三つの小隊とイリアン直下の部隊を三つに分けた計六つの隊が六回に分けて乗ることになるわ」

「……俺たちは何回目？」

「あたしたちは一番最後ね。まあ光車は五分に一台は通るからそれほど変わらないわ。そしてヴィネージへと着いたら陸路を伝い海岸まで出る。ここは長い距離じゃないけど夜行性の大型肉食獣が出るって話だから気をつけて」

「……了解」

「で、海岸まで出たら部隊ごとに小型軍用船が用意されてるから、到着次第それでエイレーン大陸まで行く。予定通りに行けば十一時

までには全隊エイレーン大陸に到着できるらしいわ。そしてそこで中隊全員が合流次第、アーティクの森へ入る。目指すはその森の中心、もといエイレーン大陸中心にあるといわれるサントマリアの丘。あそこの森にいる守護獣は厄介って話だから、早めに着かないと零時に間に合わないものね」

「あの、それなんだけどさ」

「うん？」

俺は西城から話を聞いてたときからずっと抱えていた疑問をぶつけてみた。

「その、なんでこの任務はそんなに急がれてるんだ？ 俺が任務の内容を聞いたのも今日だし、今日の今日で任務を終わらせるって尋常じゃないスピードだろ。それに零時って、魔光石の回収に時間が関係あるなんて話もよく分からん。何よりスパイが八人もいるのに、ただの戦力増強のために俺一人をわざわざ送りつけたっていうのも納得がいかない」

俺がずっと喉につつかえていた疑問を全て吐露すると、椎名は目を見開いた。

「……これは驚いた、西城准将から何も聞いていないのね」

「ああ。時間がないから説明は全部こっちにいるスパイに聞けって」「あーもう、それ絶対説明するのが面倒だっただけじゃない……べつにいいけどさあ」

そう言っつて口を尖らせる。そんな様子を見てるとなんだか少し申し訳ない気がしないでもないが、これだけは聞いておかなければならなかった。

なぜなら俺も今夜エイレーン大陸……いや、その先のアーティクの森を抜け、サントマリアの丘へ行くつもりだったからだ。

花高の廊下で西城に捕まり、軍令と聞いてほぼ諦めてはいたが、どういうわけか今その場所へ行くことになっている。これらが全て何の因果関係もない偶然だとは到底思えない。

「でもその話は長くなるから追って説明するわ。今はとりあえずス

パイとしての行動のことだけ話す」

「ちよつと！」

「ああー分かった。じゃあ一つだけ言っておくけど、今回の任務に瀬田君は必要不可欠なの。瀬田君がいなければあたしたちはサンタマリアの丘へたどり着くことができない。とりあえず今はこれでいいかしら？」

「……………」

理屈を抜いて事実だけを突きつけられるというのはなんとも気分の悪いものだと思うが、時間を見てみるといつのまにかだいぶ時間が経っており十九時を四分の一ほど経過したところだった。確かに任務開始時間まであまり長く話しこんでいては目立ってしまう。

俺は断腸の思いで泣く泣く了承することにした。

「……………分かった」

「うん。とりあえず今必要な情報としては、中隊にはあたしたちを含めてスパイは八人いる。まあ、それぞれデイリアンが選ぶほどの腕前だから信頼していいわ。あたしたちはエイレーン大陸に着いてアーテイクの森へ入ってから……………イリアン帝国軍の殲滅にあたる」

「ああ。それまでは大人しく一員として動いていればいいんだな」
「その通り。分かってると思うけれど、殲滅にしても真っ向からやり合っている時間も戦力もないから、森の中で各隊が守護獣と交戦しているところを急襲するように」

「ああ。分かってる」

「その後の魔光石の回収方法は道中説明する。あと瀬田君はこつちのスパイの人たちの顔が分からないでしょうから」

椎名はそこで左腕を見せてくる。そこには虎のようなものが彫られているプレスレットがあった。

そういえば俺が受け取ったトランクにも同じようなものがあつたっけ。趣味の悪いアクセサリーだと思ってそのまましまっておいたが。

「分からないときはこれを見せてもらいなさい。千乃国系の人があ

戦してたらとりえあず確認すること。あんたも付けるのよ、いい？」

「……り、了解」

「なによ、嫌なの？ 言っとくけど、これはあんたのための識別記号なんだからね。文句は一切受け付けないわ」

「……分かったよ」

そのスパイたちに俺の写真を見せたのなら、俺にも写真を見せればいいじゃないか……

「ちなみにこの虎の意味は」

「ああーそれは言わなくていいって！ 分かる、分かるから」

「……あらそう？ まあいいわ。それじゃあそろそろ行きましようか。三十分前には集合しないと怪しまれてしまう」

どうせ『ベルタイガーの虎！』とか言い出すんだろう。

西城ウィットニー。どこまで悪趣味な人なんだよ。

「それじゃあ、頼りにしてるよ！ 瀬田君」

「ああ……よろしくな」

俺たちは軽くハイタッチし、互いを信じ合うように視線を合わせる。

その綺麗な黒い瞳に見つめられた俺は、もう恥じらいはしなかった。この任務には、俺一人なんかが背負うには到底かなわないほどのものが懸かっているのだ。俺は精神を研ぎ澄まし自分の体内を流れる血液と魔力をかみ締める。

来たころよりだいぶ騒がしくなっていた店内の雑音は、外に出た俺の耳に心地よい残響として残り、消えていった。

3 - 5 (後書き)

ようやく第三章終了です。

前言通り本当に長い章となってしまうました。

様々な設定が出てきていますが、それがどの程度読者皆様に伝えられていたか全く想像ができませんし、正直自信もありません笑
今後も精進します。

さて次の章は久しぶりの桜井氏が登場です。

お付き合いいただける方は、引き続きよろしくお願致します。

4 - 1 (前書き)

第四章突入です。

桜井君がこの”Xデー”に何をするのが問われる章になると思います。

どうか彼に声援を。

そして皆様に一時の娯楽を。

警備のおじさんに肩を叩かれて俺は目を覚ました。

副部長が帰った後、俺はその場で横になり眠ってしまったようだ。辺りは暗く、校舎周辺を見渡してみても生徒の姿は見つからない。普段、夜の進路指導室からは昇降口から帰宅する生徒や、体育館から出てくる部活帰りの生徒など様々な人が見えるのだが、今は誰の姿も見えなかった。

「大丈夫か？ もう昇降口閉めるぞ」

「あ……はい、すみません。今出ます」

警備のおじさんにそう言っていると、俺はすぐそばに転がっていた自分のバッグを拾い廊下へと飛び出した。

外に出ると真つ暗な体育館から数人の生徒が喋りながら出てきた。ドアに鍵を掛けている姿を見るに最後の集団だろう。人気のない学校内に数人の馬鹿笑いが響き渡る。

俺はその声を意識的に遮断し、気だるげにバッグを肩に掛け駅までの短い道を歩き始める。携帯を見ると時刻は八時十五分前だったので、副部長との一件からそれほど時間は経っていないようだ。

「はあ」

今日はもう最悪の日だった。あんな無様なことを、よりによって部活で最も毒舌な鉄面皮として知られ、その影響力を浸透させている副部長にぶつけてしまった。彼女は俺の情けない泣き言を受けてどう思っただろうか……いや、そんなことは想像に難くない。こんな情けないやつは二度とこの部活に来るな。いるだけ邪魔だ。そんなことを思ったに違いない。

そうしていると改めて思う。とうとう俺は今日、自分の精神バランスを保つために、今までずっと硝子細工の如く大事に抱えてきた文芸部での居場所までも失ってしまったのではないだろうか。もしそうだとするならば、明日から俺が普段の鬱々とした学校生活を送

ることで蓄積される不吉な塊は、確実に行き場を失ってしまう。学校において唯一無二の安らぎの場が無くなれば、俺の精神は学校という場から乖離してしまうのだ。今までそれを繋ぎとめていたのが文芸部での、味気なくも平和でゆったりとした時間だったのだが、それがなくなるとなれば、これからその鬱憤を、ただひたすら心に蓄積させながら学校生活を送るということになる。俺にとつて学校という場が、一切の安らぎのない、精神に負担を強いるためだけに存在する本当の地獄と化してしまう。

俺は帰路を地面とにらめっこしながら歩きつつ、しばらくそんなことを頭に巡らせていた。しかし、どう頭をひねったところでその懸念を振り払うだけの答えは見つからなかった。

「はあ」

重荷を吐き捨てるように再び腹の底からため息を吐く。当然のことながら肩をせわしく押し付けてくる重圧が軽くなる気配はない。

「いつそ、どこか遠くにでも逃げようかな……」

「おおーう、桜井真一君じゃあないか！ 奇遇だな！」

俺が自転車から転げ落ちて泣きながら帰宅する幼児のような気分で歩いていると、後ろからそんな声が投げかけられた。身を強張らせて俺は振り向く。

「ぶ、部長」

「うん？ どうしたね桜井真一君。そんな自転車から転げ落ちて泣きながら帰宅する幼児みたいな顔をして」

「……いえ、べつに」

「はっはっは！ 部長の私に隠し事とは無意味なことをするものだな、君も。私が我が部に所属する同士たちのことについて、知らないことがあるとも思っているのかね？」

「……じゃあなんで聞いたんですか」

正直俺は驚いていた。この人にはどういうわけか、部員の情報が全て筒抜けになってしまうのだ。どういうルートで入手しているのかは誰も分からないし、その情報を悪用するなんてことはもとより

考えていないようなので、部員全員が深くは突っ込まないことにしている。

しかしそんな誰も知らないような情報を持っている部長は、誰もが知っている部員の名前を覚えられないという特性を持っていた。そしてそれはこの俺についても例外ではなく、以前までは『桜井新太郎君！』とか『桜井シンジ君！』とか言われていたものだ。

その部長が今、俺の名前を正確に呼んだ。これはもはや寒気がするほどの異常事態だ。いくら部活でその存在が透き通っているような俺でも、一度部員に話せばたちまち部室を支配する話題となりえるものだろう。

「大方、副部長に何か言われたのだろう。彼女はそろそろやると思っていた」

「……本当に何でも知ってるんですね」

「当たり前だろう、私は部長なのだからな。はっはっは」

夜の街に部長の馬鹿みたいな高笑いが響く。辺りに花高生徒の姿は見当たらないからだが、この人は学校で会う度にこれなので正直一緒にいるのがかなり恥ずかしい。

「まあちよつとそこへ座ろうじゃないか。このままでは話す間もなく駅へ着いてしまう」

「……こんな都市なのにわざわざ公園ですか」

そこには都会の風景にはあまりにそぐわない、閑散とした公園があった。ブランコは片方の鎖が落ち、滑り台は錆び付いている。この道は毎日通るが、この公園で幼児が遊んでいる姿などかつて見た覚えがなかった。

「学生が悩みを相談するのは、河川敷か公園と相場が決まっているのだ」

そんな意味の分からないことを言い、部長は近くにあった公園のベンチを指差した。こんな風に部長から誘われるのは初めてのことだったので、若干気味の悪さを感じたが、部長はいたっていつも通りだったので俺も部長に倣いベンチの隣に座った。

「それで、一体何を言われたのだね？」

「……あれ、部長は何でも知ってるんじゃないんですか」

「おいおい君も困った奴だなあ。僕から一方的に言ってしまったら会話にならないじゃないか。君から話すことに意味があるのだよ」

つまり知ってるわけだ……この人って……。

「いや、まあ相手が分かっていることを改めて話すなんてちょっと恥ずかしいですけど」

「いいから早くしたまえ」

部長はいつのまにか持っていた缶コーヒーをプシュッと開け口に含んだ。

こうして俺の話を聞こうとしてくれた人なんて高校に入ってからいた覚えが無かった。そう思うと、この部長は志乃さんと同じく……いやそれ以上に心の清き人なのかもしれない。

『誰かに話してみるのもいい』俺の中の何かがそう言った。

それと同時に『急げ』という言葉が響いた。部長の気が変わらないうちに聞いてもらったほうがいいだろう。

都会だというのにクビキリギスの鳴き声が異様に響くその公園で、閑散とした風景を見ながら俺はふうつと息を吐いた。

「……副部長は、俺が批評会に作品を出さないことが気にいらないみたいで」

「それは部員としての活動を放棄しているからではないのかね？」

即答だった。その答えはあまりにも的を得ているため、逆に欠点がないのかと探してしまいそうになる。

「けど、じゃあどうして批評会への作品提出を義務化しないんですか。そうすれば僕だって」

「……作品を出せた、かね？」

部長の眼鏡の奥の瞳がこちらを覗き込んでくる。部長は俺よりずっと身長が高いので見下ろされるような構図になるが、副部長と対峙したときのような居心地の悪さは感じなかった。

「どうだろうな、桜井真一君。今作品を出せない者が、果たして義

務になったからと言って書けるようになるものかね？」

「それは……書くしかないんですし」

「それは理由にはならないだろう。書くしかないから書けるようになる、っていうのは理屈が通らないよ」

「でもその場合、苦し紛れにでも書かないと俺は」

「そこなのだ」

部長はまるで、俺がそう言うことを待っていたかのようにそう言いベンチを立ち上がると、数歩前へ出てこちらを見る。

「物語を書きたくない者が物語を書く。これにどれほどの意味があるというのだろうか！ 僕はね、桜井真一君。物語とは、人が今まで歩いてきた結果、抑えようもなくにじみ出てくるものだと思っているのだよ」

「歩いてきた……結果」

「そうさ。それまでに人が歩んできた道や出会った出来事の数々。幸せや苦難が渦巻くそれらが、自分を媒介して始めて生まれ出るもの。小説とは、そうして出てきた物語が世に出るために、やむを得ず取らざるをえなくなった形でしかない。その形ばかりに気を取られながら、無理やりに物語を紡ごうとすることに何の意味があるというのだろうか」

「……でも、誰もがそんな、小説の物語のような人生を送っているわけじゃありません」

「そんなことはない。僕たちがこの地に生まれ、普通に日常を送っていることがどれほどの奇跡だと思う？ そんな中で経験することが、物語にならないわけがないじゃないか。作品の世界も、そこに登場する人物も、全て自分の経験からにじみ出るものだ。そこに変わりはないのだよ」

俺は正直、そんなものは理想論としか思えなかった。物語を紡ぐということとは、物語を完結させるということは、そんな自然とできることなんかじゃない。もしそうだとしたら、俺が今までこんなにも苦しんでいるのが馬鹿らしく思えてくるじゃないか。

「もし桜井真一君が物語を完結させることができないうのだとしたら……それは、君が今まで”人生における物語”を、完結させたことがないからではないかね？」

辺りは車道から聞こえる車の走行音と未だうるさいクビキリギスの鳴き声だけが響いている。奇妙に思えるほど人の通りが少ない。

「いや、言い方を変えよう。君はまだ、”完結できないでいる物語”を……抱えているのではないかね？」

その言葉に、自分の中の何かを外れる音が聞こえた。蒼く光る場所での一夜の光景が脳裏に浮かぶが、すぐに泡となって消えていった。それが何なのか、俺には分からない。けれど、一瞬だけ、終始俺の胸中を支配していた得体の知れないモヤモヤ感を取り除かれるような気がした。

「数々の物語の積み重ねで出来ている人生。君はもしかしたら、そんな物語を何一つ完結させたことがないのかもしれない。君の様子を見ているとね、そんな気がしてならなかったんだよ」

「……すみません。言っている意味が分かりません」

大事なものって何だろう。我ながら情けないことだが、俺にとってそこまで大事なものなんてあつた覚えが無い。過去の思い出は全て黒よりも暗く、唯一本を読んでいるときだけが、その暗闇に一点の光を灯してくれるものだった。そんな俺が、ずっと抱えるほど大切なものなんて……思い出なんて。

「……そうか」

部長はそこで押し黙ったまま、何も言わなくなった。普段は嫌というほど喋る部長だが、静かなときはそれはそれで不気味だ。

その沈黙に耐え切れなくなった俺は、苦し紛れに口を切った。

「その、副部長が『百聞は一見にしかず』なんて言ってたんですけど、それが意味するところも、正直俺には意味が分かりませんでした」

部長は立ったままこちらを見てくる。その目は何かを語っているように見えるが、やはり俺には分からなかった。

「……君はとことん鈍い奴だな」

返す言葉もない。副部長が言ったことも、部長が今言ったことも、俺には理解できない。小説を書くことと自分の人生なんてまったくの別物じゃないか。人生なんてつまらなくて苦しいだけのもの。けど小説は違う。夢があつて、愛があつて、生命の輝きがある。こんな腐った俺の人生なんかとは、全然違う。

「だがそこがグッドだぞ、桜井真一君！ 君の可能性は、まだまだ無限大に広がっているのだ！ そう、この宇宙のようにね！」

部長はそう言って狭い空を仰いだ。俺は全く意味が分からないまま呆けているしかなかったが、不思議とその部長の姿には嬉しさのようなものが滲んでいたように見えた。しかし、やはり副部長が意図するところを教えてくれる気配はない。

そうして俺は思った。

部長と副部長。

やっぱり俺に、この二人のことは理解できそうにないようだ。

「海へ行こう」

俺が携帯で二十時を回ったのを確認すると同時に、それまでカメラを持って公園をウロウロしていた部長がおもむろにそんなことを言い出した。

部長はカメラを首にぶら下げたまま、こちらのベンチへ歩いてくる。

「え、ええ？」

「海だよ海、桜井真一君！」

「いや、こんな時間からですか？ いくらなんでも」

「こんな時間だからこそじゃないか！ 祭は夜が本番だろう？」

「祭……あ」

思い出した。確かに今日は祭りがある。この辺では数多くある祭の中でも、ひととき異彩を放つ夏祭り。小さいころ親に連れられて以来、ずっと行っていなかったので存在自体を忘れていた。

「三戸羽琉提灯祭、ですか」
ミトバルチヨウチンマツリ

それは毎年行われる、この辺に住む者なら誰もが知っている祭だった。潮風を直接感じることができ、海沿いに舗装された道に沿って、数多の提灯が吊るされる。それと平行して走る車道には屋台がずらりと並び、すみれ色の布を纏った山車の上には米俵五個分ほどの大太鼓とそれに合わせて踊る祭男があり、皆、提灯が放つ独特の明かりと太鼓の音に胸を躍らせ、出店から迸るしょっぱさと甘さが入り混じった香りに唾液を飲み、それらが海辺一帯を包み込む、祭り全体のかぐわしさに酔いしれる。ここ数年間、長らく俺とは无缘だったイベントだ。

「そうさ！ もはやここら一帯では、夜を照らす提灯の光は夏の風物詩となっているではないか」

「まあ、そうですね。でも流石に今からじゃあ」

「港までは三戸羽琉駅から電車で二駅。十分間に合うさ。僕の記憶では九時半から花火が上がるはずだよ」

「そう……ですか」

この人が何を考えているかは、もはや俺には分かりそうにないの
で考えるのをやめよう。とりあえず祭りに行くか否か。

今日の出来事のことをウダウダ考えるのにはもう疲れた。どこか
遠くに行つて、自らの悩みがどれほど小さいことなのかを悟るのも、
精神バランスを取るためには効果的な方法といえるのかもしれない。
それに、今置かれていた状況で、自分に手を伸ばしてくる人など
目の前の奇人しかいない。”鬱”という毒素に侵された俺の脳は、
そう判断したようだった。

「い、行きます……す」

俺が半ば投げやりな気持ちで言おうとすると、部長は目を細めて
俺が座っているベンチの後方にある茂みを見つめている。行動も表
情も、つくづく忙しい人だ。

「……部長？」

「そこにいるのは狸か！」

そう言つてカメラを構える部長。辺りが暗く、街灯の光が下手に
照らしているためよくは見えないが、確かに茶色い毛が草にまぎれ
て見え隠れしている。

「え……ええ？ 本当のため」

き、と言う間もなくその毛が上方へと舞い上がった。しかしその
下に付いていたのは毛むくじゃらな体（まあ、本物の狸など見たこ
とはないが）などではなく、パツチリした二重の目に薄い唇、ツン
と高い鼻に薄く紅潮した頬……つまり、人間の顔がくっついていた。
というか、人間だった。

「ちつがー……うー!!」

相手を認識するためのしばしの沈黙。その女子生徒は花高の制服
を着ており、額からはじんわりと汗が滲んでおり、制服には要所要
所に乱雑に草っ葉が散らばっている。

見紛うはずもない。

クラスでも部活でもその魅力を振りまく、俺には手の届かない白の花。

「志乃……さん？」

「おおー志乃葉子嬢ではないか！」

「鏡花です！ いい加減名前覚えてください」

「そうか！ 志乃鏡花嬢！ こんな時間にそのような木陰の茂みに籠って、昆虫採集なら僕が良い場所を」

「ち・が・い・ま・す〜！ それに、なにが『おおー』ですか。ずっと気づいてたくせに」

「え……部長」

「だから何度も言わせないでくれたまえよ桜井真一君。我が部員のこと僕が知らないことがあるわけないだろう？」

「いつのまにか『我が部員』になっちゃってますよそれ。ちよつと僕らを所有物にするのは勘弁してくださいよ」

「そんなことより！ 二人とも乙女を狸扱いだなんて、ひどい！」
「ごもつともです。貴方のような可憐な方を、」

「『貴方のような可憐な方を狸扱いとは……ああ、どうかこの愚民めを心行くまで罵り下さい』だそうだ、志乃鏡花嬢」

「……」

「ちよ、え、え、俺？ 勝手なこと言わないでくださいよお！ どんな変態ですかー！」

ただでさえ良い印象を与えていない志乃さんに、これ以上変な印象を与えるようなことは言わないでくれ。冗談半分で言ったことが、人に重症を与えることだってあるんだぞ。そう思わずにはいられない。

しかしそれは以前までの俺の場合だ。

もはや学校生活に対して寄せる想いなど存在しない今の俺にとっては、そんなこと、遠い地で起こっている火事のようなものだ。もうどうとでもなればいい。もとより志乃さんからの好意などに期待

はしていないのだから。

そんな風に思うと、先ほどから肩を押さえつけてくる重荷が軽くなるような気がした。

部長は明らかに引きつった顔をしている志乃さんのことなど意に介していないようで、カメラを鞆にしまいながら言う。

「ふむ。しかしそれは、志乃鏡花嬢が髪など染めているからではないかね？ 確かに校則で制限はされていないが、染髪は感心しないなあ」

「これは地毛なんです！ なんなら匂いでも嗅い……もう！」

ぷりぷり怒る志乃さん。彼女が怒るのは珍しいが、その様子は普段クラスにいるときと同じように見えたので、俺は平静を装いつつも心のどこかで安心していた。

学校での唯一の居場所まで失った今の俺がいるのが絶望というのなら、『絶望に落ちたら、あとは上がるだけ』『失うものなんてない』……そんな風に歌う世のミュージシャンたちの気持ちも、少しだけ分かる気がした。

そんな気の中であられたからか、俺はいたって自然と志乃さんに話しかけることに成功していた。

「それより、志乃さんはなんでこんなところにいたんですか？」

「え、それは」

「志乃鏡花嬢は学校を出てからここまでずっと後を着いてきていたのだよ」

部長が異様にでかい鞆を持ち上げて言った。

「え、な、なんでそんなことを？」

「いや、その……あはは」

「大方、進路指導室で桜井真一君が副部長と言いついて合意をしているところを覗き見でもして、副部長が出てくるのを確認したところで逃げようとして校門に出た後、桜井真一君が出てくるのを待っていたら僕が一緒に合流しなかった、といったところだろう」

「な、なにが大方ですか！ 全部言っちゃってますよ……なんで部

長そこまで知って」

「だから何度も」

「私たちにプライベートはないんですか！」

「……まったく君は大げさだなあ。例えば君が今日着ている下着の色など僕は知らないのだよ？ プライベートなど」

「当たり前じゃないですか！ 部長のばか！」

泣きそうになりながら怒る志乃さんを見るのは、やはりかなり新鮮だった。彼女は怒っていても可愛……いや清いオーラが全快だった。頬を更に紅潮させ、部長に掴みかからんばかりの勢いの割りに、全然怖くない。

「はあ……ごめんね、桜井君。覗き見するつもりはなかったんだけど」

「あ、いいえ。別に気にしてませんよ、本当」

「気にして……ないの？」

「桜井真一君は、よりもよってあの副部長に全部本心を吐露してしまったからね。もはや誰に聞かれようと構わないのだそうだ」

「……ふーん。そういうものなんですかね」

「そういうものなのだ」

「なんで部長が答えてるんですか」

まあだいたい当たってるけど。

副部長に、いつ公開処刑を下されるかもしれない俺としては、もうそれ以上に恐れるものなんてない。いつそ、全員にこの俺の無様な本音が知れ渡って、軽蔑された気分にいるほうが楽というものだ。「さて、志乃鏡花嬢は気が済んだようだよ、桜井真一君。急いで祭りに向かわねば！ 燃え上がって残った灰だけのところに行ったら、何も面白くはないだろう」

「……祭りに行くって、本気で言ってるんですか」

それより、志乃さんが校門で待っていた理由が未だに分からない。俺に何か用があったのか？ クラス内身分では底辺に位置し、口数も友達も少なく、果てにはあんな無様な醜態を晒した俺に志乃さ

んが？

体内に疑問が渦巻くが、それを聞くのはなんとなく憚られた。用があるならあちらから言ってくるだろうし、過去のことを鑑みてもあまり良いことのようにには到底思えない。俺はむやみやたらに藪を突くようなことはしないのだ。いくら投げやりになっているからといって、なにも自ら自滅への道を歩むこともあるまい。

「僕は常に本気だよ、桜井真一君」

「あ、えと、それなんですけど」

志乃さんが割って入ったかと思うと、彼女はそこでもってしまふ。しかしその様子は以前までの、俺と話すことに対する嫌悪を少し違って見えた。

「うん、どうしたね？ 志乃鏡花嬢。我々は先を急ぐのだ。用がないなら行かせてもらってもいいか？」

「……うう」

志乃さんは必死で何かを言い出そうとしつつ、こちらを見つめてくる。その端正な顔立ちと短く整えられたナチュラルブラウンの髪は、見る者全てを魅了すると言ってもいいだろう。そんな彼女に、今までぎこちない付き合い方しかしてこなかった俺が見つめられている。鼓動が早くなり心臓がどうにかなりそうだ。

しかし、その言葉にならない視線を一身に浴び、理解し、汲み取ってあげるだけの男子力などというものは、生憎俺は持ち合わせてなどいなかった。

「ふうー」

一呼吸置く志乃さん。

急いでいるはずの部長も、俺も、その志乃さんの様子を静かに見ている。街灯に集まった虫が時折耳を掠めて来るのが鬱陶しい。

俺が自分の同類の如し小さい虫と格闘していると、やがて俯き、胸に手を当てていた志乃さんが顔を上げた。

何かを決意したような瞳を一瞬こちらへ向けたかと思うと、すぐに部長のほうを正面から見つめ、手を挙げて志乃さんが言った。

「部長！ 私も祭り、行きたいであります！」
そのときの志乃さんの姿に、俺の心に小さな灯火が宿るのが分かった。

勘違いされては困るので一応言っておくけれど、俺は祭りが存外嫌いではない。

都会生まれ都会育ちの俺には、祭りと言っても、古くから伝わる伝統的な舞踊があるような祭りには参加したことはなかったけれど、それでもそこはやはり都会で、数だけならそこらへんの地方都市なんかよりはずっと多かった。その数は、電車で一駅行くことに祭りがあつたと言っても過言ではないだろう。

そんな年中祭りをしているような平和ボケ地域で生まれ育った俺は幼少期、なにかと祭りに駆り出されることが多かった。両親が祭り好きということもあつたし、俺自身が今とは比べ物にならないほど行動的なガキだったということもあるのかもしれない。近くの神社や寺の祭りなどには毎年必ずといっていいほど参加していたし、そこで出会ってしばらく仲良くした友人もいたものだ。

その俺の経験から言わせてもらえるなら、祭りの日は大抵お天道様のご機嫌となる。

そして今日もまた雲一つない濃紺の夜空が広がっていた。

三戸羽琉提灯祭りは、花火が終了した後三十分ほど太鼓台と山車が路上を行き交い、太鼓のドンドコという音と笛の音色が遠くなりつつ徐々に静まってくという終幕を迎える。幼い頃その空気に身を投じていた俺は、自分だけが祭りの空気に取り残されているような気がして、どうしようもない寂しさがこみ上げてきたのを覚えている。祭りの後の静けさというのは、どうしてああも人を切ない気持ちにさせるのだろうか。一度本腰を入れて研究してみたい気がする。

今現在、時刻は二十時二十分。

花火が上がる一時間前ということもあり、祭りは大いな賑わいを見せていた。たこ焼きやイカ焼き、焼き鳥などの香ばしい匂いから

わたがしや水飴などの甘い匂いまで、祭り特有の食べ物の匂いが海から吹く潮風と混ざり、祭り全体を包み込んでいる。屋台や太鼓台に吊るされた無数の提灯が彩る路上は絶えず人ごみに溢れ、海沿いに埋め立てて地として舗装された歩道に等間隔で並ぶベンチには、学生と思しき人たちが友人や恋人と、甘く、楽しい一夏の思い出を作っている姿が目についた。

とうとう学校での場所を失った、学内身分の底辺に腰を据える俺と、クラスでも部活でも男女問わない人気を集める白き花、志乃さん。そして変人柏木を彷彿とさせるほどの奇人として学校中にその存在を知らしめる部長という、傍から見れば何かのテレビ企画のような組み合わせで祭りを訪れた俺たち三人は、雑踏が渦巻く路上ではなく、それと平行して走る海の見晴らしが良い歩道のほうを歩いていた。三人が全員花高の制服だったため、なんとなく祭りから浮いている気がしてならない。

俺は歩きながらただぼうつと海のほうを眺めた。この暗闇に包まれた水平線の先には、北の大地、エイレーンがある。幼い頃、両親の仕事の関係で一度だけ訪れたことがあるが、街一面を彩る雪景色と、星が降りしきる夜空がなんとも綺麗だった記憶がある。その景観は、出来ればもう一度行って拝んでみたいと思うほどだ。

しかしそれを思うと、またしても俺の心臓がドクンと大きな脈を打つのだった。

「部長、りんご飴が食べたいであります」

祭りで賑わう様子をフラッシュを焚いたカメラで撮りまくっていた部長に、志乃さんが言った。

ここまでの道中、志乃さんとは何度か言葉を交わした。流石にクラスの子と話すようにはいかなかったかもしれないが、その様子に俺が今まで感じていたぎこちなさはなかったように思う。散々今まで悩んできたそれが呆気なく解消されてしまい、もしそれが学校生活に希望を捨てたことによって生み出されたものだとしたら、なんというか、案外学校生活というのは、力まない程度にそつなく

こなしたほうが上手くいくのかもしれない。

「志乃鏡花嬢、あの人ごみの渦に飛び込んでいく覚悟はあるのかね？」

「もちろんです。私めの行動原理は、その七割が食欲によるものと断言できます。そのためとあらば、例え火の中水の中！」

そして先ほどから、部長と志乃さんは意気投合しているようだった。祭りの気にあてられてなのかは分からないが、その口調までもが似てきてしまっていて、一人平々凡々とした俺が浮いているような錯覚に囚われる。明らかにこの二人のほうが変なだけだということだ、なんとということだ。

「そうか！ ならば桜井真一君と一緒に帰ってくるがいい。僕はここで実地調査があるのでね」

……は、二人？ 冗談じゃない。そんな恐れ多いこと俺にできるわけがないじゃないか。それに実地調査ってなんだ。さつきからなんでカメラなんか持つてるんだ。その無駄にでかい鞆の中身はなんだ。

驚愕と怒りと怯えと疑問が俺の頭を四周くらいしたところで、俺はようやく言葉としてそれらを吐き出すことができた。

「え、部長二人って」

「……り、了解しました！」

「ちよ、志乃さん!？」

「いやいやいや、二人とか絶対無理ですよね？ そうですね？」

「ほら行こ、桜井君」

しかし俺の意思などおかまいなしに志乃さんはそう言って先を歩き始めたので、テンパリながらも俺は後に続いた。

俺たちは人でごった返した路上を縫うように歩いていく。提灯の明かりが眩しく、酔った人が奇声を上げているのが太鼓の音に紛れて聞こえてくる。

志乃さんは本当にりんご飴を食べたかったようで、遠くの「りんごあめ」と書かれた屋台を見つつけるや否や猪突猛進していった。人

が多い場所に長い間来ていなかった俺だったが、幼い頃の経験もあってか自然とこの空気に溶け込むことができていた。辺りが浴衣姿に身を包む若者で溢れる中、制服姿のままこちらを見向きもしないで独走して行ってしまった志乃さんの行き先を目で追い、俺は後を追う。

俺がシマウマの大群に踏み潰された犬のような気分で志乃さんが向かった方角へ歩を進めていると、誰かと足が引っかかった。ひ弱な俺はたまらず人ごみに埋もれるようにこける。

「痛っ、すみません」

俺は無様に転がりながら謝り、相手の方を見る。相手も同じく体勢を崩したかに思われたが、その予想は外れた。

「……」

相手は三人組の男だった。俺の視線の先には全く体勢など崩していない、ピンと立ったままこちらを見下ろしてくる男たちの姿があった。

「……おい、なんかいるぞ」

「……」

真ん中にいた長めの黒髪の男はそう言うと、未だ立ち上がれないでいる俺の脇腹をいきなり強く蹴り上げてきた。腹部に激痛が走り、血が逆流しそうになる。

周辺の人に気づかれるのだけは避けたいと思い、俺は沸き起こる様々な感情を押し殺し、すかさず立ち上がる。しかしそれと同時に頭の上から何か冷たい液体が降ってきた。未だにズキズキと痛む腹に気をとられていた俺は、それがラムネだということに気づくまでしばらく時間がかかった。

「っ！」

髪を手で振り払い水気を飛ばすが、炭酸のシュワシュワという音と砂糖のベタベタ感が相まって非常に気持ちが悪い。

その男三人組は性格の悪そうな笑みを浮かべたままこちらを見ている。そのうち、その中の坊主頭の男が携帯を取り出し、レンズを

こちらへ向けシャッターを切り始める。俺は必死で自分の顔を隠すがお構いなしの様子だ。

それが終わるとようやく区切りがついたようで、ケラケラと下品な笑い顔を浮かべたまま真ん中の男が俺に近づいてきた。

「このこ出てきてんじゃねえよクス。死ね」

その長い前髪をだらんと垂らした陰鬱な男が、俺の耳元でそう言い捨てる。

それから三人組の男たちはこちらを一瞥し、バッテリーセンターの帰りのような和気藹々とした様子で人ごみの中へと消えていった。

「……」

全ては雑踏の中での一瞬の出来事。周りの人は、今起こったことに気づく様子もなく、ただ祭りの空気を楽しんでいる。

「……くそっ」

あいつらのことを俺は知っていた。忘れるわけがない。

現二年八組の三人組。一年の頃同じクラスで、当時、まだ輝かしい高校生活に夢を抱いていた俺をどん底に突き落とした奴らだ。おかげで俺に対する根も葉もない噂は学年中に広まり、二年になった今でもその噂が尾を引き、確実に俺を学校という社会から隔絶しようとしている。

あいつらは、暇になってはわざわざクラスまで来て、俺に対する陰湿な嫌がらせをしてくる。その悪行の数々は、傍目からは冗談半分でやっていると思われていたのかもしれないが、俺の心には確実に傷跡を残していた。

少し考えれば分かったことだ。学校からこんなに近いところで開かれる祭りに、うちの高校の生徒がいないわけがなかった。

「……はは」

学校に対する希望を持たなくなった今が楽だ？ そんな風に思っていたつい数分前の俺はなんて平和な奴だったんだ。実際に今、ああいう輩に弄ばれただけでも、俺はこんなにも憂鬱を抱えることが

できるじゃないか。希望が持てなくなったから楽だ、なんていうことはありえない。ただ単に現実を見ようとしていなかっただけだったんだ。全てが上手くいかなくなり、唯一の居場所までなくなったという事実を受け止めたくなくて、見つめたくなくて、目を泳がせていただけだったんだ。

今から追いかけて言い負かすなり殴るなり、普通の男だったらそんなことをするのだろうか。けれど俺はしない。殴りかかったところで、俺よりもずっと体格のいい相手に勝てる見込みもないだろうし、それこそ火に油でしかない。それならば、こうして我慢して、相手が飽きるのを待つほうがずっと得策だ。

「……我慢すればいいんだ」

こんなことは慣れてしている。自分にそう言い聞かせ、俺は丹念に髪から水気を飛ばすと、何事も無かったかのように歩き出した。雑踏が押しよせてくるため、志乃さんが向かった方向へは体を向かわせるだけでも難しい。さっきから脇腹が危険信号を送ってくるが、そんな痛みにも構う余裕もないほど路上の混雑は激しかった。

もはや歩いたというより流されたといったほうが近い。俺はなんとか志乃さんが待つ「りんごあめ」と書かれた屋台に着いた。

志乃さんはその店の前で俺が来るのを、両手に一個ずつりんご飴を持ち、祭り全体を見回すようにして待っていた。

「あ、桜井くんおそーい！　こんな人ごみで乙女を一人にするなんて、紳士失格だぞっ」

志乃さんは左手に持っていたりんご飴をこちらへ突き出してくる。一人になったのはあなたが勝手に先へ行ってしまっただけでしょくに。

「ごめん。ちょっと人の数がすごすぎて」

「もう……でも本当、すごい人だねえ。食べ物のためなら火の中水の中の私も、人ごみの中だけは勘弁したいかなあ。なんて」

あははっと笑う志乃さん。彼女はもうこの数分だけで祭りの空気に酔っているようにも見える。人はアルコール以外でも酔うことが

できるというのは、案外本当のことなのかもしれない。

「本当、ですね。俺なんてさっき転んじゃいましたよ」

「あはは、桜井君は弱いなあ」志乃さんは屋台の柱に背中をくっつける。「男の子はもっとしっかりしないとね」

返す言葉もない。

「でも私は祭りのこういう雰囲気……やっぱり好きだな。なんか、良い」

「僕も、祭りは嫌いじゃないです」

俺がそう言うと、志乃さんは目を丸くしてこちらを見る。

「へえ〜意外。桜井君は絶対こういうの嫌がる人だと思ってた」

志乃さんはりんご飴をむしゃぶりながらそんなことを言った。

「あ、ごめん。そんなに話したこともないのに、勝手に」

「いえ、僕みたいな人が祭り好きだなんて、普通思いませんよね」

言ってから少し嫌みっぽくなつたかなあと思った。すると彼女は、少しバツの悪そうな表情で何かを言いよんどんでいる。

「あ、べつに……あの、嫌みってわけじゃあ」

「そのー……さ」

志乃さんはそこで少し目線を落とし、頬をかく。それは何かを迷っているときの彼女のくせなのかもしれない。こういう志乃さんを見て、俺は何と言えいいのか分からず、アタフタすることしかできない。今までもろくに女子と話してこなかったのだから当然だ。

これほど過去の自分の行いを呪いたくなることもそうそうあるものではない。

「桜井君、何かあった？ ちょっと元気ないっていうか、無理してるっていうか……ごめんね、変なこと。勘違いだったらいいの。忘れて」

「……」

ああ、忘れていた。

この人は一年の頃からこういう人だった。どこまでも他人を思いやれる、聖母マリアもかくやという女子高生だった。俺と気まずい

空気になること自体がそうだ。適当に距離をとっておけばいいところを、志乃さんはなんとか話そうとしてくれていた。そんな彼女の本质を見て、俺は「白き花」などとクサイ名前をつけていた。自分だけの呼び名を。

先ほどの三人組との一件で俺は憂鬱になっていた。しかし、そういった感情を隠すことを日常的にしてきた俺は、その悲しい能力においては相当の自信があった。その憂鬱を表情にも言葉にも出さないように押し隠すことなど、社会人が社交辞令の笑みを浮かべるかの如く行ってきたのだ。

しかし志乃さんは今、その僅かな隙を見破り、俺の胸中を察し、また悩んでしまっている。そんな僅かな違いを気づく彼女がすごいのは言うまでもないが、これは俺の社交辞令に落ち度があったということだ。

あんなやつらのこと、気にしなけばいいのだ。それに今は志乃さんが一緒。心に隙間を作ってはいけない。

「すみません」俺はナチュラルな笑顔を作るように心がける。「少し人ごみに押されて、疲れていた……のかもしれない。でももう大丈夫ですよ」

「……そっか」

志乃さんは少し考えるような素振りを見せたけど、ようやくまたあの眩しい笑顔に戻ってくれた。

「じゃあ次行こ！ 私祭りなんて久しぶりだから色々周りたい。いいかな？」

「は、はい。もちろんです」
「ふふっ」

志乃さんは満面の笑みで、今度は俺と歩調を合わせるように、未だ祭り人たちが騒ぐ路上を歩いていく。

この、ひとたび笑顔を見せるだけで百人の人間を幸せにできそうな少女と二人で祭りを周るといって、つい小一時間前の俺には想像もできない夢のような状況に、若干気後れ気味だった俺は、その脳を

一喝し歩を進めた。

しかし、疑問だけはぬぐえない。彼女は どうして 今日、こんなにも俺にかまうのだろう。 どうして こんなに俺に、優しくするのだろうか。

志乃さんの隣を歩きながら、浮ついた頭でボンヤリとそんなことを考えた。

しかしどれほど考えたところで、今の俺にその答えは出ない。

脳に、またもや「急いで」という意味不明な声が響く中、俺たちは互いをちらりと確認し合い、祭りの雑踏の中に入っていた。

それから俺たちは色んな屋台を周った。時刻を見ると、もうそろそろ二十一時を回ろうとしている。

志乃さんは行く先々で「おおー！」とか「おいしい〜！」とか、いちいち大きなリアクションを取って、辺りの人に笑顔を振りまいていた。初めはむっつりとした表情でだんまりを決め込んでいる人も、その微笑みを受ければ、たちまち顔の筋肉が削げ落とされるかのように表情を崩した。志乃さん自身も無理して笑っているように見えず、心底祭りを楽しんでいるようだった。

そんな志乃さんは、どうやら金魚すくいに関して特別な思い入れがあるらしく、祭りに来たら一度はやらないとその後三日間くらい気分が落ち込んでしまうという。どうしてそれほどまでに金魚すくいをしないといけないのかと聞くと、彼女は急に真顔になって答えた。

「桜井君！ 君は分かっているよ！」部長みたいな口調で志乃さんが言った。「金魚すくいってというのは、単に網で金魚を掬い上げるだけの娯楽じゃないんだよ！ 金魚を、あの狭くて、外界との接触の一切を遮断された小さな世界から、私たちが救い出す行為のことを言うの！ 私たちの身勝手に、広い世界へ出られず、狭い世界に住居を置くことを甘んじて受け入れた金魚たちを救い出す……それはすわなち、『金魚掬い』ならぬ、『金魚救い』なのさよ！」

なんだか上手いこと言っている気がするけれど、そんなことを言う志乃さんは金魚を捕まえたらどうするつもりなのだろう。少し気になったが、そんな特別な思い入れがあるものをむやみやたらに刺激はすまいと思い、俺は疑問を飲み下して言った。「それじゃあ……やる？」

俺たちの前には、赤字で「金魚すくい」と書かれた黄色い看板があった。屋台では浴衣姿の子供たちがワイワイと金魚を狙っていて、

「もう一回」と傍らにいる母親にごねている子も見える。その姿に、なんとなく自分の幼い頃の姿を重ねてしまい、俺は心の中だけでクツクツと笑った。

「あ、桜井君今笑った」

すると志乃さんがささず突っ込んできた。夏と人ごみの暑さが、祭りの喧騒と共に体全体を取り巻いてくるので、その顔には汗が滴り、頬は紅潮している。普段見る天真爛漫な雰囲気とは少し違い、大人っぽい女性のような表情に見えてしまった俺は、たまらず彼女から視線を逸らした。

「そんな風に自然と笑う桜井君、初めて見たかも」

「笑って……ましたかね。はは、そんなことより、金魚すくいやるんですか？」

「ふふ、もちろんっ」

志乃さんは無い袖を捲り上げるような仕草を見せ、露店のオヤジさんに二百円を払った。

結果から言ってしまうえば、志乃さんは金魚掬いがとんでもなく下手だった。

幼い子供に混じって金魚掬いをする志乃さんというのは、見ていてなんとも微笑ましいものだったが、その下手さを見ると苦笑を隠しきれない。彼女は肘を張って、浅いところにいようが深いところにいようがとにかく一匹の金魚に狙いを定めると、通称ポイちゃんと呼ばれる金魚掬い用のフレームを深々と水槽に入れ、漁師が釣竿を引き上げるかのような勢いで掬い上げる。しかし、そんな勢いにポイちゃんが耐え切れるはずもなく、フレームに張られた紙はあっけなく破れるのだった。

「ええー、ちよっとこの紙弱すぎだよー。おじさん、もう一回！」

「おいおい姉ちゃん、金魚すくいは初めてか？んな勢いよく掬ったら敗れちまうよ、普通」

かっか、と笑うおじさんは、白のTシャツに腹巻をしてタバコを吹かしている。またもや瞬殺をくらった志乃さんは「もういっちょ

！」とお金を差し出す。

「ち、ちよつと待って志乃さん」俺は見ていられず、慌てて声を掛けた。

「うん？」

「志乃さんもしかして、金魚掬い初めてなの？」

「そ、そんなわけないじゃん！」志乃さんはあからさまに焦った様子で言う。「小さいころから金魚を救い出してきた私が初心者のはず……ないでしょ？」

「……じ、じゃあさ、その……掬い上げた金魚は、今までどれくらいいるの？」

「……むう」彼女はムツとした表情になったかと思えば、すぐにしゅんとしてしまった。「……すみません、0匹です」

「……ですよねえ」

やっぱりそうか。今までは恐らく、一匹も取れなかった子供に店の人がくれる二匹程度の金魚を喜んで持ち帰っていたのだろう。俺がこんなことを思うのもあれだけど、なんとも哀れな人だ。

「そ、その……僕でよかったら教えましょうか？」

「えっ、桜井君金魚掬いできるの？」

「うーん、並には、かな」それほど得意というわけではないが、今の志乃さんよりは出来るだろう。

「是非お教えくださいっ！」

志乃さんはそこで、古今東西の軍人がやるように、右肘を張ってピンと伸ばした手をこめかみ辺りにあてた。敬礼している姿もかわり……清い人オーラ全快だ。

俺は幼い頃祭り友達から教わった金魚掬いのコツを、志乃さんに一つ一つ教えていった。

教えていくうちに分かったことなのだけれど、志乃さんは驚くほどに飲み込みが悪かった。一つを教えるとしつかりと覚えていられるのに、次を教えると前に教えたことを見事なまでに忘れてしまう。そうしてミスする度に「やっぱりこのわっかのせいだよ」なんて

言って、ぶんぶん怒ってしまい、俺は軽く苦笑する。

「違う違う。こっちの紙が張ってあるほうが表だから、こっちで掬って」

「こ、こうでいいのかな？」

「そう、そのまま……ああー違って、そういう出目金みたいな大きい魚は店側の誘いだから。狙わないほうがいいってさっき」

「わ、分かってるもん！」

「水面が一番近い、小さめのやつを狙うんだよ。あくまで金魚は追いかけない。大方の動きを予測して、自分が広げた範囲網に引っかかるのを待つ。そしてポイちゃんを入れるときは水面から斜めになるようにして一気に、でもそうつと」

「もおー。桜井君一気に言い過ぎっ」

そんなことを言いつつも志乃さんはポイちゃんを構える。先ほどまでの豪快な素振りとは違い、慎重に、忍び寄るように水面へ近づけていく。狙うは全長一・五センチほどの、水面付近を漂う小さい赤い金魚。

その金魚が、さらに水面付近へ上昇してくる。その頭が水面と同じ高さになるつとする。

「今です！」

志乃さんは手を素早く動かし、ポイちゃんを金魚の下に滑り込ませると、軽い動作でそつと持ち上げる。

「落ち着いて、ゆくりそのまま斜めに引き上げて」

「こ……こうかな」

「ああーそれじゃあまだ角度が足りないかな。もうちょっと斜めにしても大丈夫だよ」

志乃さんは震える手でゆっくりと引き上げていく。まだ少し角度がない気もするが、おわんまでもう少しだ。

そして……

「桜井……くん」

「……はい」

「……」

「……あの、志乃さ」

「やったあああああああああ!!!」

志乃さんはそこで大きく声を上げて飛び跳ねて喜んだ。

傍らには水の入った器。そこには、いきなり迷路に放り込まれたような戸惑いを見せながらウロウロしている、小さい金魚が一匹いた。

「ありがとう桜井君！　ありがとう!!」

「い、いいえ。掬ったのは志乃さんですから」

俺はちよつと祭りを知っている人なら誰でも知ってるようなコツを教えただけだし。むしろあれほど失敗してもめげなかった志乃さんが凄いと思いますよ。

しかし掬い上げると同時に、ポイちゃんは破れてしまっていた。

それほど器に入るかギリギリのところだったのだ。しかし掬い上げた彼女の表情には達成感に満ち溢れたものが垣間見える。一見、金魚を一匹掬っただけのようにみえるが、彼女の中には偉業の端緒を開いたような感嘆があるのかもしれない。

「……私にも、命が救えるんだ」志乃さんがボソリとそんなことを呟いたのが印象的だった。

金魚掬いを終えた志乃さんの顔には、流石に疲れの色が見えたので、俺は「どこかで休みますか？」と聞いた。志乃さんは最初部長と合流することを提案したが、すぐにそれを撤回すると、少し離れた噴水のある広場へ行こうと言った。祭りの中心から少し離れた、噴水のある広場なんていうと、ちよつと恋人のようになってしまふんじゃないかと思い、若干緊張に体が強張る俺だったが、なんとか「行きましょう」とだけ言うと、志乃さんに続いて歩き出した。

道中、志乃さんの口数は少なかった。取った金魚を大事そうに持ちながら、どこかうつとりしたような表情をしている。俺はそれを見て、まるで恋わずらいをする乙女のようなうだなあなんて思った。天使のような彼女のこんな表情を見せられては、どんな男でもそう思

うに決まっている。

そこで俺は気づく。非常に今更なことかもしれないけれど、どこかで目を瞑っていた「志乃さんに対する好意」というものを、沸々と湧き上がる熱と共に自覚し始めていた。

広場に着くと、トナカイだか鹿だか分からないような銅像を中心に据えた噴水が出迎えた。少し高台にあるためか、月明かりに照らされた海の眺めは絶景と評するに値するものだった。辺りには二人組の男が、海側にある柵から景色を眺めているだけで、他に人影は見当たらない。こんなに良い場所だというのに人が少ないとは、もしかしたらここは祭りの穴場なんじゃないだろうか。

「ふうー」

志乃さんは大きく息を吐き、入口から一番近いところにあつたベンチへと腰を下ろした。「桜井君も座つたら？」と促してくるので、俺は「あ、はい」と言い拳動不審になりつつも隣へ座る。

「なんだか疲れちゃったねー」全く疲れを感じさせない語気で志乃さんが言った。「久々にはしゃぎすぎちゃったかも」

俺には普段の学校生活で常にはしゃいでいるイメージしかないのだが。

「にしても桜井君すごいねー！ あんなに金魚掬いのコツ知ってる人、なかなかいないと思うよ」

「そんなことないですよ。祭り好きの人なら大抵知ってるんじゃない？」でも、あの店のポイちゃんはダメですね。7号なんて使ってたし」

「ななごう？」

「7号は紙が薄いんですよ。5号だと厚くて掬いやすいんですけど」志乃さんは「ああ、7号！ 種類なんてあるんだー」などと関心したような顔を見ると、「詳しいねえー！」と言った。

「く、詳しいかな」俺は彼女の真っ直ぐな言葉にたじろぐ。

「詳しいよ！ あんなに強気になつてる桜井君見たの初めてだし。本当に祭りが好きなんだね」

俺が祭り好き。今の俺にしてみればなんと奇妙に聞こえるフレーズだ。本来ならば、あの思い出したくもない三人組のような反応を取られて然るべきなことだろう。この白き花、志乃さんでなければ、こんなに目を輝かせたりなんか、絶対にしない。

あと二十分ほどで、花火が打ち上がる時間。もしこのまま二人でいるとしたら、志乃さんと二人きりで花火を見ることになるのか？ それでは本当に恋人同士のようになってしまう。学校から一切の希望を失った日に、今まで夢にも見なかった、志乃さんとツーショットで花火を眺めるなんてスペシャルイベントが待っているとは、人生とは本当に、何が起こるか分からないものだなあ……なんて、すこしませ過ぎだろうか。

「あの、俺はここぞとばかりに、この祭りでの道中、常時抱えていた疑問をぶつけることにした。「志乃さんはどうして、今日こんなに……その、学校から僕の後なんか着いてきたりなんかしたんですか？」

反応に困る質問かもしれないし、彼女としては気分の向くままというだけで、他意はないのかもしれない。こんなことを聞いては、変に身構えてしまうかもしれないし、うざいと思われる可能性だって高いだろう。それでもいい。もとより良い返事など期待していないのだ。

しかしだからこそ、志乃さんと多少会話をしてきた今なら、聞けるような気がした。

ドキドキと鼓動が打つ中、俺は志乃さんの返答を待った。彼女は目を泳がせ、頬をかいている。俺はどう見ても彼女から険悪な雰囲気は感じ取れず、少しばかりの安堵がこぼれそうになるが、必死でそれを飲み込んだ。

そのまま少しの沈黙が続いたが、俺は心臓がはち切れそうなのを押し隠し、彼女の返答を待った。

やがて、彼女が口を開く。

「……ごめんね。私、最低だったよね」

彼女の口から出てきたのは、俺の予想の斜め上をいつていた。俺は「えっ」などという声しか出ず、うまく反応ができない。

「私、桜井君のこと……避けてたじゃない？」

「そう、ですかね」それは気づいていたが。

「うん、そうなの。桜井君のことをよく知らないで、出所も分からないような噂に振り回されたりなんかしてさ。一、二年つて同じクラスで、部活まで一緒に、うちみたいに生徒の数がとんでもない学校では珍しいほど付き合いがあった人なのに、それでもあんな態度しか取れなかった。本当、私って最低だよ」

「そんなこと……ないです」俺は精一杯否定する。「俺が誰からも相手にされてなくても、志乃さんは……ちゃんと話してくれたじゃないですか」

「あんなの、話したうちに入らないよ」

そこで彼女は少し目を瞑り、何かを決心するように見開いた。

「ごめん。私、本当は桜井君のこと、あんまり良く思ってたなかった……ううん、はっきり言う。私、桜井君のことが嫌いだったの」

別段驚くことでもない。こんなことは予想できていたことだ。今も昔も、志乃さんに好かれるような要素など、俺は持ち合わせていない。むしろ過去形であることに違和感すら覚える。

「私は以前……いや、正確には今日の部活が終わるまで、桜井君が嫌いだった。それはどうやっても変えられないこと……でもそんな外面と噂に惑わされた私は、もうやめることに決めたの」

……なぜだ。彼女に今日、何があったというのだ。嫌っていた相手と、いきなりこれほどまでに仲良くできるようなことがあったというのだろうか。

俺は浮かんできた疑問を、そのまま問いかけることにする。

「なんで、ですか。僕はあんなにひどい噂が広がっていて、他人ともまともに口も利かないで、ただ机で本だけ読んでるような奴なんですよ。それに……志乃さん、進路指導室で、僕が副部長に向けて

言った泣き言を全部聞いていたんですよ？ それなのに、なんでそんな」

「だから、なの」志乃さんはいつしか真剣そうな顔になって、ベンチの隣に座るこちらを見つめてきた。「副部長が部員を残して何かするのは、そんなに珍しいことじゃなかった。私も何度か評価ノートの記入を手伝わされたこともあるし。でも、桜井君は……今までなかったじゃない？ だからその、珍しいなあと思って、ついつい聞き込んだ」

……なるほど、そういうことだったのか。確かにそれまで副部長とまともに会話したことなどない俺が呼ばれたとあれば、志乃さんに限らず、部員の間では小さな事件として噂になるかもしれない。

「そうして、桜井君と副部長が言い合っているところを……全部聞いちゃった」

「……ひどかったですよね」

俺は心にあつた気持ちをそのまま言葉にした。けれど志乃さんは、その俺の言葉を、頭を振って否定した。

「そんなことないよ」

「……志乃さんは優しいから」

「違う、違うよ」

彼女は必死の形相で、そんな風に俺に訴えかけてきた。

「私、桜井君の言葉を聞いて、感動しちゃったの。それまで桜井君は、なんか、いつも冷めたような、斜に構えているような感じで、あんまり好きになれなかった。本をたくさん読んでみたいだったから、批評会でも部員の人たちが書いたものを、心の中で嘲笑ってるんだろうな。なんて思ってたの。他の人が一生懸命書いてるのを評価して、自分は書かずにそれを読んで、品定めする立場。そんな感じがどうしても、好きになれなかった」

「……」

正直なところ、分かっていたこととはいえ、いざ本人の口からそんなことを言われるのは相当にきつかった。今まで俺に向けてくれ

ていた笑顔は、全て虚構なものだと言われたも同然なのだ。上辺だけの優しさだとは理解しながらも、彼女に笑顔を向けられるたびにほんわかとした気分になっていた俺は、その事実を受け止めることに少々手間取った。

けれどそれ以上に俺は、そういうことを包み隠さず、真っ直ぐ話してくれる志乃さんに、ただただ惹かれた。彼女の優しさの本質が、清い善人オーラが、彼女の紡ぐ言葉からにじみ出ていた。

「けど、それは違ったんだよね。桜井君は、自分なりにちゃんと努力して、苦しんでたんだよね。それなのに私は、桜井君のことを分かるうともしないで、勝手に決め付けてた」

「でも……作品を書き上げていなかったのは事実ですし、そもそも原因は俺の態度に」

「『物語を完結させることができなくなってしまった』」

志乃さんはそこですつと立ち上がると、夜空を見上げてそんなことを言った。

「難しいよね、本当」それから彼女はこちらを振り返る。「物語を完結させる、やり遂げる、終わらせるっていうことは、本当に難しいよ。それは小説だけじゃなくって、現実世界でも、何かをやり遂げるっていうことは、やっぱり難しい。その気持ちは、私も、痛いほど分かるんだ」

「……」

「そしてきつと、部長も副部長も、私と同じ風に思ったんじゃないかな」

「……え」

部長と副部長が？俺が理解できそうにないと諦めていた二人が、志乃さんと同じことを考えていたというのか。

「私たちみたいなさ、物語を書こうなんて思う人は、みーんな最初躓くと思うんだ。当然だよ。文字だけで世界を作って、人を作るんだから。言ってしまうえば、神様の仕事みたいなものでしょ？そんなことを最初から上手く出来る人なんて、いないと思う」

そこで俺は、何かがはじけたように副部長と部長の言動が理解できていく自分に気づく。あの人たちは……。

「部長も副部長も、最初から書けたはずなんてないよ。みんなそれぞれ、物語を完結させるのには苦勞してる。だから……」

志乃さんはそこで、俺の瞳を真っ直ぐに覗き込んでくる。彼女は本当に、透き通るような瞳をしていて、油断すると意識ごと吸い込まれてしまうような錯覚を覚える。

「物語を完結させれなくなったなんて……言わないでよ。桜井君の物語は、まだまだこれから……でしょ？」

僅かに震えた声でそう言った志乃さんの栗色の髪が、突如吹いてきた突風に遊ばれて宙を舞う。

俺は、部長や副部長、椿鷹史などの人間は、自分とは違う人種だと思っていた。皆が平等に神様から才能を与えられ、俺だけが抽選漏れしたかのように凡才以下の能力を植えつけられたのだと、勝手に卑屈になっていた。そんな馬鹿げたことを思いながら、何一つ作品を完成させることができないと決め付けていた。だから副部長にも「あなたに分かるはずがない」だなんて言ってしまった。

今なら分かる。志乃さんが必死で想いを訴えてくれた今なら、副部長があのと俺に一心に送ってくれていた瞳が語っていたことも、部長が人気のない公園で夜空を仰ぎながら言った言葉の意味も、全てが手に取るように分かった。

「副部長が……僕に言ったんです。『百聞は一見にしかず』って」「……うん」

「部長は僕が、『物語を完結させたことがない』なんても……言っていました」

「……うん」

「今ならあの二人が言ったことが分かる気がします。僕は……色んなことを、投げやりにしてきた」

小学校、中学校、高校と起こった友人とのトラブルでも「もういや」となげやりになっていた。小説を書くことだって、自分には

他の人のような才能がないからなんて言って、書くことを投げ出した。小さいころ習ったピアノも、一週間だけ続いたアルバイトも、第一希望だった公立高校へ向けた勉強も、全て途中で諦め、投げ出していたのだ。

物語を完結させたことがない。

今まで逃げ続けてきた俺に、なにかをやり遂げたことが無い俺に、世界を作るなんて大役が務まるはずもなかった。

「だから」黙ってこちらの様子をうかがっていた志乃さんが言った。「まずは、なにか大事なものを見つけよう。そして何かを始めて、ちゃんと最後までやり遂げようよ。始まった物語を、終わらせてみようよ」

大事なもの。俺にとって、大事なものってなんだろう。そんなものと、無意識にここまで来る過程で捨ててきてしまったのかもしれない。そんな重そうなものは俺の人生にはいららないと思っていたのかもかもしれない。

家族はもちろん大事だ。しかしだからといって家計を助けるためにアルバイトでもするのか？ 家の手伝いでもするのか？ 学生の俺にそれは求められていないだろうし、そもそもそれは明らかになにか違う気がする。

友人や恋人はどうだろう。考えるまでもない。俺に長らく付き合い続けてきた気心知れた人などいるはずもない。

それでは人ではない何かなのだろうか。夢とか希望とか勇気とか、そういう抽象的なものことだろうか。それは誰にとっても大事ななものかもしれないけど、今の俺にそもそもそんなものがあるのか？ が疑問だった。

結局、そうしていくら頭をひねっても、今の俺にとって大事なもののなんて見つからなかった。部長、副部長、そして志乃さんが、それぞれ精一杯俺に伝えようとしてくれていたことがようやく分かったというのに、今の俺に、それに答えるだけのモノなんて、なかった。

「……」

俺は額から垂れてくる汗を手で払い、脱力したように傍らのバツグへと手を置いた。

リン。

そこで、鈴の音のようなものが耳に響いた。

それと同時に、俺の頭に、なにかとても大事なことが蘇ってきそうになる。

「なんだ、なんなんだよ、これ」俺は、浮かび上がってくる数々の出来事と、決して忘れてはいけないなにか大事なことが、次々と脳を埋め尽くしていくのを感じた。

俺の様子を奇妙に思ったのが、噴水の縁に座っていた志乃さんがこちらまで歩いてくる。

しかし、志乃さんが立ち上がるのと同時に、俺たちが通ってきた道のほうから女の呼び声を聞こえてきた。

「志乃〜！ こんなところで何やってんのー？」

背筋がぞくりとした。声の主のほうを見たくもない。

だか、それが誰だかは明白だった。

その声は、俺たちのクラス二年六組の副委員長であり、クラスの総元締め、高居直子のものだった。

高居直子は数々の伝説を持っている。

学内身分の底辺にいる俺でも、その伝説の数々は耳にしていたし、直接目撃したこともあった。

そして、そんな彼女に対する俺の眼識を以って得た印象を一言で表現するなら、“女帝”。

高居直子は二年六組の副委員長だけれど、その本質は自他共に認める委員長だった。彼女は絶対的不可侵な存在で、その一存でクラスとして参加する行事に関することの大半が決まる。うちの学校では委員長は男子、副委員長は女子と決められているので、現二年六組においては天下一浪なんていう奴が委員長となっているけれど、二人の力関係は誰が見ても歴然だった。

彼女の伝説に関することを一つ紹介する。去年の文化祭で起こったことだ。

花高の文化祭は毎年十月に開かれる。当時一年生だった高居は既にクラス内での地位を確立させていて、クラスメイトの大半が彼女の手中にあった。彼女の性格と能力を持つてすれば、どんな集団に行こうと自然現象のようにまとめ役となるようで、当時、根も葉もない噂で精神的に追い詰められていた俺でも、文芸部員の噂話を通して、彼女の”人の上に立つ”ということにおけるカリスマ性については度々耳にしていた。

そんな彼女が所属していたクラスは去年、文化祭でお化け屋敷をやることになっていた。その発案自体が高居のものだったようで、彼女は夏休みより積極的に指揮をとり、自らが所属する弓道部での練習と平行して文化祭に向けた準備を着々とこなしていた。クラスメイトたちも高居の先導力に引つ張られ、各々が献身的に準備へ参加したようだった。

しかし、夏休みが明け九月の半ば、文化祭の準備期間まで残り二

週間と迫り、教室内をお化け屋敷の装飾で埋め尽くそうとしているとき、高居がボソリと呟いた。

「……子供だましね」

高校初の文化祭が間近に迫って気分が高揚していたクラスメイトたちは、指揮官である高居のその言葉にしばし膠着状態となる。しかし高居は、大したことはないかのように、続けてこんなことを口走った。

「やめやめ。演劇にしましょう」

それからのことは一年経った今でも信じられない。

文化祭まで残り二週間という短い期間で、そのクラスは確かに演劇を完成させ、一年生でありながらその年の文化祭で金賞に輝いた。花高は一学年十二クラスで構成され、計三十六クラスからなる千乃国の中でもかなり大きい部類の学校だ。そして文化祭における各クラスの出し物は、その中から大賞を一クラス、金賞を二クラス、銀賞を二クラス選ばれる。大抵は経験のある上級生が受賞を総占めするらしく、その並み居る強豪を押しつけて一年のクラスが金賞を受賞したことは空前で、学校中で大きな話題となり、更には「三戸羽琉だより」という地域紙にまで取り上げられた。

俺はその演劇を見に行つてないので分からないのだけれど、その地域紙によると内容は完全にオリジナルだったようで、その脚本も演出も全て高居の手によるものだったようだ。クラス内での反感を押し切り、自ら一番多いセリフである主役を演じた彼女に、クラスメイトたちは呆れを通り越して、軽い陶酔状態に陥っていたとも言われている。

演劇の名前は確か「不思議人」

あからさまに手抜きタイトルはもとより、わずかに二週間で全ての準備を終えたところを考えると、そのストーリー構成や演出を考えるのにも時間はほとんどなかったはずだ。その上で金賞を受賞したというのだから、どんな話なのか俺も少しは興味がある。

第五十一回目の文化祭で初めて高居の才覚が露呈されたというこ

とで、この「51回目の覚醒」と言われる出来事は、確実に私立花丸高校の歴史に深く刻まれたことだろう。

しかし、以上は高居直子が能力的異端児であることを証明する一例ではない。まだまだ数多の伝説があり、俺の知らない話もきつとあるのだろう。

問題はその能力ではなく、性格だった。

人の上に立つという才能を持ち備えている彼女は、弱者も強者も分け隔てなく接することができる器の大きさを持っていた。俺たちのクラスではもちろんのこと、部活動や委員会、学年委員においてもそれは同様で、二年生となった今だからこそ、自ら率先してそれぞれの集団を牽引していた。

しかし、欠点のない人間など存在しない。

彼女は自分の考えに絶対的な自信を持っているあまり、それに反する因子をとことん潰しにかかってくる。また、無気力な人間に対しても同様の措置を取るのだ。

俺の経験から出た個人的な考えなのだけれど、影響力の強い人間が独善的になることほどたちが悪いことはない。

そして何より、俺の卑屈で無気力な姿に対して、厳しい説教という名目で罵詈雑言を浴びせ、クラス内の笑い者にするという行為を受けて、尚更そう感じた。

まあ、当人に俺を貶めようなどという気はないにしろ、そういつた空気は自然と人々を刺激していくものだ。真っ直ぐな言葉に悪意を付加していくのは、いつもギャラリーなのだ。

「志乃じゃない。今日部活があるとかで来れないって言ったのに」
高居が数人のSP（自称）を連れてこちらへ歩いてくる。

そこで植木によって死角となっていた俺の姿を高居が捉えた。

彼女に心底軽蔑されている俺と、その天真爛漫な空気がえらく気に入られている志乃さんが一緒にいるという事態は、彼女の目にはかなりの珍百景として映るようだった。眼を大きく見開き、口を半開きにしたまま動かない。

志乃さんのほうを見ると、こちらもちちらで動揺しているらしく、「え、っと」なんて言って頬をかきながら目を泳がせている。

「ごめんねー、なあちゃん。本当は来ないつもりだったんだけどね、なんか流れて、部活の人と来ることになっちゃいました」

「え、でも、なんでよりにもよってこいつと一緒？ ってかお前！」高居はそこでこちらを指差して「あんた志乃の人の良さに漬り込んで何かしたんじゃないでしょうね」と言い、蛾でも見るような目でこちらを睨みつけてくる。

「そ、そんなことしてませんよ」

「……まあ、あんたにそんなことする勇氣なんてないか」

余計なお世話だ、という言葉はもちろん口には出さない。

「じゃあなんで祭りの日に、どうしてこんな意味ありげな場所にいるの？ 志乃が誘ったの？」

それは志乃さんとしては、相当答え難い質問のように思えた。

小中高と、集団意識が特に幅を利かせている中で、そこから飛び出す勇氣を持つ者は少ない。誰か一人を蔑むことで保たれていたバランスを崩してしまう可能性があるからだ。

さつき志乃さんは、俺の態度とか行動が好きになれないと言っていたけれど、彼女が気まずそうにしていたここの一年間の態度の裏には、きつとそういった想いもあったはずだと、俺は心のどこかで思っていた。

けれど志乃さんは

「えへへ、誘っちゃいましたー。ドッキドキのシチュエーションでしょ？」

彼女は少しおどけた調子でそんなことを言っつて、いたずらっぽい表情をする。

「……あんたら、いつからそんな仲良くなつたの？」

SP（自称）の一人の、高居の右腕として知られる女がすかさずそんなことを聞いてくる。マスカラが以上に濃く、街灯に照らしつけられている金色のミディアムヘアが風になびいている。化粧が

全体的に濃い、肌が白く、細身なためか水色の浴衣がよく映えて見える。

しかしこいつは仲間意識が強い上に俺に対しては悪意百パーセントで当たってくるので、正直高居以上にこの場を見られたくなかった相手だ。

「うーん。今日から、かな」右手の人差し指を顎にあてて、あつさり志乃さんが言った。「そうだよな？ 桜井君」

「え、ええ！？」

ここで俺に振るんですか。相手方から浴びせられる視線が今にも槍に固形化して、俺の心臓とか脳みそとかを串刺しにするんじゃないかっていうこの状況で。

「ええーっとー、そう……だと思えます」

煮え切らない返事に自分でも呆れる。

言葉を発してからあれこれ後悔するのは、俺が人生を通して向き合っていかなければならない問題なのかもしれないなかった。

俺の情けない返事にも、志乃さんは「なにそれー」なんて言いながら笑っている。この場でもよって高居の集団と遭遇してしまった彼女の真意は分からないけれど、そうやって見せてくれる笑顔はやはり俺の心を癒してくれるものだった。

「……ふーん。仲良いんだ」

金髪の女がそう言っつつまらなそうに引つ込む。その姿に、どことなく嫌な気配を感じる。

「……桜井。あんたまさか、志乃に気があるの？」しかし高居は、そんな彼女の様子など気にもせず、腰に手を当てて俺のほうを向いた。

「え、ええ！？ いいや、いやいや。何言ってるんですか……」そう言っつて俯くしかない俺。志乃さんのほうをちらつと見てみると、彼女は少し驚いたような表情でこちらを見ている。こんな拳動不審な俺を見ないでほしい。

「だってあんたがクラスのやつと二人でいるところなんて、外国語

の読み練習のときくらいでしょ？　ましてや祭りで異性となんて、それ以外考えられないのだけど」

「いや、その、ですからこれは部長とはぐれちゃったので」

「じゃあその部長さんは？」

「……」

部長がいなかったことがこんな形で裏目にでるとは。

彼の素性については、俺や志乃さんはおるか、部員のほとんどが知らないだろう。よってこの祭りで「実地調査」なんて名目で彼が行っていることを、俺たちは

「分かりません」

「ちよつと、その部長さんが何するかも分からないで祭りまで着いてきたっていうの？　そしてわざわざこんな場所で二人つきりに？　信じられない」

「二人になつたのは、私がりんご飴食べたかったから桜井君に付き合ってもらったの」俺が答えに迷っていると、志乃さんが助け舟を出してくれた。「でも人ごみの中じゃ部長探すのも一苦労だから、とりあえず静かなところから連絡とろうって思ってたさ」

「……そう」

そこで高居は、意外にもあつさりと納得したようだった。こいつが俺のことを心底軽蔑しているのは自明だが、貶めようという悪意がないのが幸いしたのかもしれない。

時刻は二十一時十五分。あと五分ほどで花火が上がる時間だ。

俺が思い描いていた、志乃さんとツーショットで花火を見るなんて夢物語はもう訪れないだろう。しかしだとすれば、最後まで志乃さんも、普段から仲の良い高居たちと一緒に花火を楽しんだほうがいいかもしれない。

俺はこの場では、明らかに邪魔者だった。

「じ、じゃあ俺は」

このへんで、と言おうした途端、志乃さんが驚いたように俺のほうを振り向いた。

しかしそれと同時に、高居たちが歩いてきたほうから男数人の声が聞こえてきた。

「あれえー？ 桜井君じゃねえー？」

「うわ、まじだ。はは、祭りになんて来るんだ」

「……」

声が聞こえるほうを見ると、見るだけで憂鬱がこみ上げてくる三人組の姿があった。

言うまでもない。俺の腹を蹴り上げ、頭上からラムネをぶちまけ、その俺の醜態をしつかり携帯に記録していた、あの三人組だ。

「……あなたたちも来てたのね」高居はあからさまではないにしろ、若干の嫌悪を込めた語気で三人組に言った。

「あ、高居さん。浴衣良い感じじゃん」

「ありがとう。でもよくこんな場所まで来たわね。ここ、祭りからも駅から結構離れてるし、知ってる人じゃないと来れないわよ、普通」

「んー、なんか面白いもん見れるっつーからさ」そう言って黒髪口ン毛は、俺と志乃さんを交互に見る。

「ホント、面白いもん見れちゃったよ。ひゃっは」坊主頭もそんなことを言っつて下品な笑いをした。

この状況は非常にまずい。何がまずいかって、志乃さんの立場が、だ。

この男三人と高居の集団が一緒にいるところには遭遇したことはないが、間違っつても良いことは起こらないと断言できる。

一年の頃から俺を甚振^{いたぶ}つて遊んでいた男たちと、現二年六組において俺へ暴言の数々を投げつけ続ける高居。その言葉に悪意を滲ませて周囲の笑い者にする女子たち。どこをどう転んでも悪い方向にしか進まない。そんな人たちの矛先が、万が一志乃さんにでも向いたらと思うと、俺の脳は錯乱状態に陥りそうになる。

「へえ、じゃあここは記念に」

案の定、坊主頭の男はそう言っつて尚も下品なにやけ顔を浮かべ、

携帯カメラを起動した。この場を撮って、学校でのネタにするのか、はたまたどこかのサイトにでもアップするのか、用途は分からないけれど、過去俺の写真の数々を、ブログなんかによく貼り付けては楽しんでいたこいつらの悪趣味な行動を鑑みると、今回もそういつたろくでもないことに使うに決まっている。

あいつらに付き合うのはもううんざりだ。とにかく逃げ出そう。つい数時間前までの俺がそう叫んだ。

しかし今の俺は、自分の身にかかる不幸よりも、志乃さんが俺と同じように、あいつらの暇つぶしの道具にされるといいう危険のほうが、何倍も怖かった。

「っ！」

俺は反射的にバッグを持つと、海沿いの歩道へと繋がる階段のほうへ一目散に走った。

「待って、桜井君！」

「ちっ！ おい待てよ！」

「あなたたち、何を」

背後から数人の声と足音が聞こえてくる。しかしそんなものに構いはしない。

もはや今日、今まで俺と志乃さんが一緒に祭りを歩いていたという事実を消すことはできないが、これ以上一緒に仲睦まじくしていれば、確実にあいつらは俺たち二人を学校中の晒し者にするだろう。もしそうになったら、志乃さんの交友関係に支障が出る可能性は大いにありえる。

もう十分だ。これ以上、彼女に迷惑をかけてはいけない。いくら先ほど打ち明けてくれた志乃さんの気持ちがあっても、今日の今日初めてまともに会話した奴を相手に祭りを回ることを本心から楽しめていたとは、にわかには思えない。彼女は普通、ああいうまともに喋れそうなクラスメイトといえるべきなのだ。

俺は人気の少ない海沿いの歩道をただひたすらに走った。尚も背後を追いかけてくる足音は止まないのだからと見てみると、俺を

追ってくる志乃さんが最前に見え、その後ろに高居と坊主頭、黒髪ロン毛が続いていた。坊主頭は、俺を追いかける志乃さんということをも写真に収めようとしているのか、走りながらも携帯のレンズをこちらへ向けてくる。辺りは提灯の明かりしかないと少し暗いが、そんなことは気にもしていないようだ。

俺はただ祭りのほうへ向かって走った。人ごみに紛れてしまえばこちらのものだ。そのまま家へ帰ってしまえば、写真は残らず、志乃さんも今までどおりの友人関係を維持できるはずだ。彼女にとっても、それが最前のことだろう。

今夜のことは、十七年間孤独に耐え抜いた俺に神様が与えてくれた、一夜限りの夢なのだ。

「いいや、ちがうよ」

ほぼ全力疾走していた俺の耳に、聞き覚えのある声が響いた。

風の音の中でもその声は一際透き通って聞こえた。

「桜井真一君の物語は今日、これからが見せ場ではないか」

海沿いに延びていた歩道はそこで、海岸のほうへ左に降りる道と祭りのほうへ右に上る道の二つに分かれていた。

迷わず右へ行こうと思った俺はそこで、海岸のほうに止めてある一隻の小さな小船を見つけた。その形が見たことも無いような不思議なもので、本当に船なのかどうかも怪しいほどだった。

しかし俺の目を奪ったのは、その船の傍らにいた背の高い男の姿だった。

「さあ、物語を終わらせに行こう」

その姿が部長だと気づいたのを最後に、俺の視界は白い光に包まれる。何も見えずに走っていると、どういっわけか俺は左側の海岸へ続く道を走っていた。

驚いている暇もなく、すぐに意識が遠のいていく。

意識が途切れる直前、花火の音の後ろで「リン」と鳴る鈴の音を、聞いた気がした。

4 - 5 (後書き)

第四章、終了です。

当初の予定よりもかなり長くなってしまいました汗
アルコールを入れれば筆が進むなんて、それこそ夢物語だったよう
ですね笑

何にしても、Xデーはまだまだ続きます。

さて、次は久々の超人、柏木氏が登場です。

更新速度が失速気味ですが、今後は諸事情によりペースを上げてい
きたいと思っております。

私の駄文なんぞを読んで頂ける方は、引き続きお付き合い下さいま
し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303v/>

Starry Sky

2011年9月25日00時07分発行